

K-579

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第86集

米沢城跡「東三の丸」

発掘調査報告書

平成 16 年 3 月
2004

米沢市教育委員会

米沢城跡「東三の丸」

発掘調査報告書

平成 16 年 3 月
2004

米沢市教育委員会

序 文

本書は、平成15年に民間のマンション建設に係わる受託事業として、米沢市教育委員会が実施した米沢城跡「東三の丸」の調査報告書です。

今回調査を実施した箇所は、米沢城東三の丸に当たり、上杉時代の上級武家屋敷があったところで、事前に試掘をしたところ、遺構や遺物が出土したことから、発掘調査を実施しました。

米沢城跡は、今まで数次にわたって、発掘調査が行われていますが、平成10年に財団法人山形県埋蔵文化財センターと合同で行った、米沢城跡二の丸の調査があります。この箇所は、「伝国之杜」建設に伴うもので最大規模の調査がありました。

出土した遺物、検出した遺構は大名屋敷跡を思わせるものであったことは、周知のことと思います。

米沢城跡は、本市のシンボルであり、本丸跡は築城当時の面影を今に伝える数少ない城跡の一つであります。

今後も周辺の開発が予想され、開発関係者との、円滑な調整を図りながら、埋蔵文化財行政を推進してゆく所存であります。関係各位の、より一層のご理解とご協力をお願い申しあげます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご指導、ご協力賜りました文化庁、山形県教育庁社会教育課文化財保護室並びに関係各位に心からお礼申し上げます。

平成16年3月

米沢市教育委員会

教育長職務代理者

教育次長 松坂昭

例 言

1 本報告書は、米沢市教育委員会が「マンション建設に伴う発掘調査として、2003年（平成15年）に実施した米沢城跡「東三の丸」発掘調査の成果をまとめたものです。

2 調査は米沢市教育委員会が主体となって、民間会社との受託事業として実施したもので、期間は平成15年6月8日（日）～同年6月18日（水）の延べ11日間であった。

3 調査体制は、下記の通りである。

調査体制 米沢市教育委員会

調査総括 村野隆男（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財担当主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財担当主任）

調査補助員 近野慶子

調査参加者 遠藤富男 笹川由紀 高橋俊助 川村交右 菊地昭夫 福田政一
菊地政和 佐藤四郎 丸山忠俊

事務局 情野憲治（文化課長補佐兼文化財主査）

深瀬順子（文化課文化財担当主査）

月山隆弘（文化課文化財担当主任）

調査指導 文化庁 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調査協力 株式会社 アサイ

4 掘図縮尺は、各図にスケールで示した。遺構平面図の方針記号は、真北に統一した。
写真図版は、スケールで示した以外は、縮尺不同とした。

5 本報告書で使用した遺構・遺物の分類記号及び遺構の図化は、「米沢市埋蔵文化財調査報告書第15号」を参考にした。

6 遺物の出土箇所は、掘図に示した。

7 遺構等の土層については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）を準拠した。

8 本報告書の作成は、菊地政信が担当した。全体的には、手塚 孝が総括した。責任校

正は、情野憲治が担当し、挿図のトレースについては、笠川由紀が担当した。

9 文中、挿図記号はB Yー掘立柱建物跡、D Yー土壤、K Yー溝状遺構、P Yーピット、T Yー柱穴、T Nー桶埋設遺構、F Yー不明遺構、D Nー井戸跡として表示した。遺物はH Zー陶磁器、Fー覆土、Sー碟として表示した。

10 陶磁器の器形や釉の名称については、水野 哲氏からご教示を得た。記して、感謝申し上げます。

11 家臣団の氏名や城下町絵図については、米沢市上杉博物館主任学芸員の角屋由美子氏からご教示を得た。記して、感謝申し上げます。

11 今回の調査区から出土した遺物は、整理、復元のうえ、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山269-3）に一括保管している。

12 本書で使用した江戸時代の遺物の分類に関しては、「図説江戸考古学研究事典」江戸遺跡研究会【編】を参考にした。（柏書房 2001年4月25日発行）

本文目次

序文

例言

1 調査に至る経過と調査の経過	1
2 遺跡の立地と歴史的背景	3
3 検出遺構	
(1) 遺構の概要	5
(2) 掘立柱建物跡	5
(3) 土壙	7
(4) 溝状遺構	8
(5) 井戸跡	17
(6) 柱穴	17
(7) 不明遺構	18
4 出土遺物	
(1) 遺物の概要	19
(2) カワラケ	19
(3) 土師質土器	19
(4) 陶磁器	19
(5) 擬鉢	22
(6) 木製品	22
(7) 石製品	22
5 まとめ	23
参考文献	35
報告書抄録	36

挿図目次

第1図 米沢城跡「東三の丸」調査区位置図	2
第2図 享保10年御城下絵図に現在の米沢市街図を重ねる	4
第3図 遺構全体図	6
第4図 挖立柱建物跡全体図	9
第5図 BY 1、DY 5・A・B平面図	10
第6図 BY 2・3平面図	11
第7図 BY 4、DY 3平面図	12
第8図 DY 1・2・4・9・10、KY 1平面図	13
第9図 KY 3・6、TY 13・14・27平面図	14
第10図 KY 5、DY 6・8平面図	15
第11図 DN 1、DY 3、KY 2平面図	16
第12図 出土遺物実測図(1)	24
第13図 出土遺物実測図(2)	25
第14図 出土遺物実測図(3)	26
第15図 出土遺物実測図(4)	27
第16図 出土遺物実測図(5)	28
第17図 出土遺物実測図(6)	29
第18図 出土遺物実測図(7)	30
第19図 出土遺物実測図(8)	31
第20図 出土遺物実測図(9)	32
第21図 出土遺物実測図(10)	33
第22図 出土遺物実測図(11)	34

図版目次

図版1 東壁セクション状況・遺構全景	図版12 カワラケ・陶磁器・砥石
図版2 DY 1半裁状況・DY 1完掘状況	図版13 水注(飯坂岸窯)
図版3 DY 1双耳仏花器出土状況・KY 2セクション状況	図版14 切立・徳利
図版4 KY 3プラン確認状況・KY 3掘り下げ状況	図版15 陶磁器碗・染付け皿
図版5 TY 1半裁状況・TY 1掘り下げ状況	図版16 双耳仏花器・植木鉢・水注
図版6 TY 2半裁状況・TY 23半裁状況	図版17 陶磁器染付け碗・他
図版7 TY 4半裁状況・TY 4掘り下げ状況	図版18 灯明皿・擂鉢
図版8 TY 5半裁状況・TY 5掘り下げ状況	図版19 擂鉢
図版9 TY 6掘り下げ状況・TY 22掘り下げ状況	図版20 擂鉢内面
図版10 TY 25掘り下げ状況・TY 26掘り下げ状況	図版21 擂鉢外
図版11 カワラケ・手焼き・陶磁器	

1 調査に至る経過と調査の経過

米沢城跡の東三の丸跡地にあった酒類販売店が移転し、その跡地に民間会社によるマンション建設が計画された。当該箇所は、米沢城跡の遺跡範囲であることから、建設に先立って建物敷地面積169.29m²を対象として、平成15年5月30日（金）に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、掘立柱建物跡と推測される柱穴を中心に土壌や溝状遺構が検出された。遺物は、カワラケや擂鉢をはじめ、陶磁器類等が出土した。遺構及び遺物から概ね16世紀から17世紀後半の遺構群と推測された。このため、関係機関と協議した結果、発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、建設会社と米沢市との間で埋蔵文化財緊急発掘調査委託契約を結び、業務委託金をいただくことになり、受託事業として実施した。

調査は平成15年6月8日（日）～同年6月18日（水）の期間で実施した。開発計画地は421m²であり、発掘に際して出る土砂を置く場所としては十分であった。現場休憩所となるコンテナハウスも開発計画地に設置した。駐車場は確保できなかったが、幸いにも近くに市有地があり、借用することができた。調査区は、信号がある交差点の西南角に位置し人通りも多く、歩道と隣接することから、安全を考慮し周囲をフェンスで囲った。

調査開始日の6月8日は、晴れの天候であった。試掘で確認した遺構確認面までは、重機で表土剥離を行い、その後面整理から着手し、この日で面整理を終了した。遺構としては、掘立柱建物跡や溝状遺構及び土壌を確認し、遺物としては陶磁器が出土した。

6月9日も晴れで経過し、溝状遺構のKY1～3の掘り下げを開始した。調査区の西南一帯は、擾乱が著しく遺構の確認は困難な状況であった。柱穴は、溝状遺構と重複するものが多く認められた。

6月10日は、土壌のDY1・2、溝状遺構のKY3・4を掘り下げた。写真は、遺物の出土状況を撮影した。この日も晴れであり、桶を設置した遺構1基を確認した。

6月11日は、各遺構群の掘り下げを実施した。この日も晴れであり、調査区の土が固くなっていることから、雨が少しほしい状況であった。

6月12日は、晴れのち曇りで暑い一日であった。昨日に引き続き遺構群の掘り下げを実施した。柱穴で底面に礫を配した形態のものを2基確認した。

6月13日は、晴れでありこの日も底面に礫を配した柱穴を確認した。土壌群は半裁が終了したものの、セクション図を作成した。

6月14日は、柱穴半裁を中心に作業を進めた。天候は晴れであった。

6月15日も晴れの天候であり、土壌の掘り下げを中心に作業を実施した。本日で一部を除き、発掘調査を終了し調査説明会を、6月18日に開催することになった。

6月16日は、くもり一時雨の天気で調査開始以来、初めての雨である。調査説明会の資料作成のため、作業員は休みとした。

6月17日は、補助員と一部の作業員だけ出勤して調査説明会の案内を関係者に配布した。

6月18日は、午前10時から調査説明会を開催し、今回の調査を終了した。



第1図 米沢城跡「東三の丸」調査区位置図

2 遺跡の立地と歴史的背景

米沢市は、山形県の南端部に位置し、周囲を山に囲まれた陥落盆地の一角を占める。市街地は、大正時代、二度の大火に遭遇したが、今も城下町の様相を色濃く残す町並みである。城下町の中心である本丸跡には、上杉神社があり初詣を始め参拝者が絶えない観光地となっている。

米沢城跡は、本丸・二の丸・三の丸の南北約900m、東西約850mの範囲765,000m²を遺跡として登録している。米沢城跡に関する発掘調査としては、昭和61年（1986）に初めて実施している。その後、平成14年度までに9次を数え、今回報告する調査区は10次となる。この外に、財團法人山形県埋蔵文化財センターが実施した3次に亘る発掘調査があり、計13箇所について発掘調査を実施してきた。

これらの発掘調査の中で、米沢市と財團法人山形県埋蔵文化財センターが、同時期に実施した二の丸跡の調査がある。この調査は、「伝国之杜」建設に係わるもので調査面積は両者合わせて10,000m²であった。調査区からは、絵図面に見られる堀跡と寺院跡が検出された。遺構は確認できなかったが、遺物として奈良・平安時代の須恵器が出土している。

米沢城は、白子神社の縁起によると長井時広によって築城されたといわれる。文治5年（1189）頼朝奥州泰衡を征する。この時、長井左衛門大江時廣供奉し、彼泰衡が興賊の武将良元が拠点とする御館山（羽前南置賜郡中津川村）の柵を攻めてこれを亡ぼす。頼朝その功を賞し即ち当郡を賜う。城は、「松ヶ崎城」又は「松ヶ岬城」と称せられた。

長井氏は、論功行賞により長井庄を所領したが、長井氏が移住したかは、いっさい不明である。その後長井氏は、天授6年（1380）に伊達氏8代宗遠の置賜侵略によって滅亡した。米沢は伊達氏の勢力に入るが、伊達氏が米沢に居住するのは、天文18年（1549）15代晴宗からで、在城期間は天正19年（1591）17代独眼流政宗までの42年間である。

長井時代には、確証はないが今日の米沢城の原形となる館が造られ、その後は伊達氏時代に引き継がれ、平地の館として整備されたと考えられる。豊臣秀吉によって、陸奥岩出山に転封される際に、米沢城下の六町（桐町・柳町・東町・立町・南町・大町）の主だった町人も一緒に移っていることから、これだけの町並みがあったことがわかる。伊達政宗が去ったあと、米沢は蒲生領となるが、7年間の短い期間である。

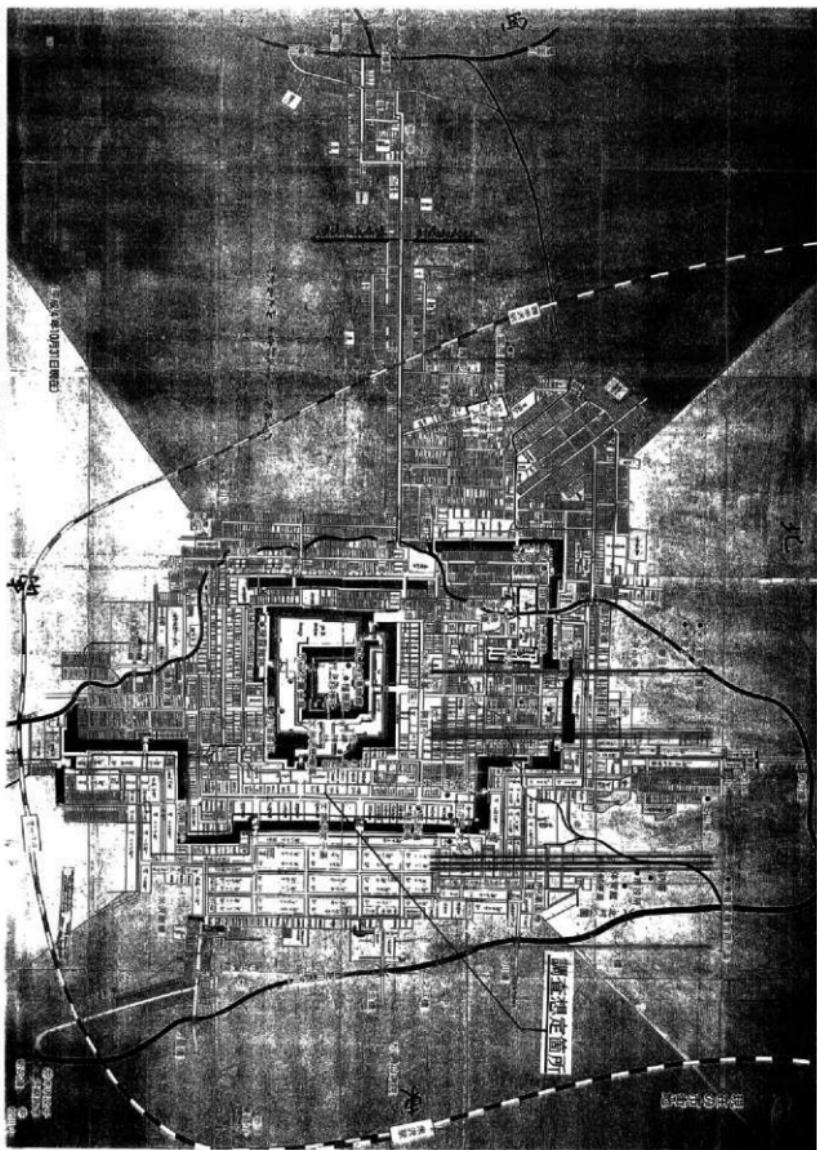
慶長3年（1598）の上杉景勝の会津移封により、米沢城には腹心の直江兼続を配置した。慶長6年（1601）の関ヶ原の戦いで西軍に属した上杉景勝は120万石から30万石に減封され米沢に移った。景勝は、11月に米沢に入り、二の丸を普請してこれに居住したといわれる。

その後、慶長9年（1604）に門・堀・櫓などの拡張工事を始め、更に慶長13年（1608）5月から外曲輪を造営し、外濠を掘り城西に掘立川（掘立川）を穿った。（上杉家記）

今回調査を実施した箇所は、第2図で示すように家臣団の屋敷が整然と配置された場所であり、九里学園高等学校の正門入り口と対面している。家臣団の配置も変容していたことがわかっており、個人名を特定するまでには至らなかったが、下記の3名が上げられる。

調査想定箇所に記された家臣名は寛永17年（1640）本庄出羽守（重長）と想定され、享保10年（1725）には竹俣勘解由（齊秀）、安田恒馬の名前が上げられる。

第2図 幸保10年縮尺下絵図に現在の米沢市街図を重ねる



3 検出遺構

(1) 遺構の概要

今回の調査区からは、土壌（D Y）11基をはじめ、溝状遺構（K Y）8基、桶埋設遺構（T N）2基、井戸跡（D N）1基、柱穴（T Y）64基、掘立柱建物跡（B Y）4棟、不明遺構（F Y）5基が検出された。これらの遺構群は、重複しているのが特徴である。共伴遺物から17世紀以降の近世に位置するものと推測される。

土壌は、調査区の北東及び北西に集中して、構築されている。平面形状は、円形や梢円形を呈し深い形態のものが多く認められた。覆土に遺物を少量しか含まないものが大半であった。

溝状遺構は、調査区の中央から南北や西方に延びる大型の形態と、東西方向に延びる小規模で浅い形態の2種類が認められた。覆土には、小破片の陶磁器が含んでいた。

桶埋設遺構は、調査区の西方にあり、上部が削平された状況の検出であった。これは、掘り込まれた面が高い箇所であったことを示しており、遺構群の中では最も新しい遺構群に属すると考えられる。

井戸跡は、調査区の北東部に位置し人工的に埋められた状況を呈しており、底面には水を溜める施設があった痕跡が認められた。今回の調査区では、最も深く掘り込まれた遺構で、底面からは冷水が湧き出しており、今でも使用可能な状態を有していた。

柱穴は、調査区全域に分布しており、掘り方や底面の形態及び覆土の観察等から吟味し、掘立柱建物跡を構成する柱穴として22基を確認した。残りの42基については、関連性を見出すことができなかった。

掘立柱建物跡は、調査区が小範囲であったことから、すべてについて全容を明確にすることができなかった。

不明遺構は、上面から掘り込まれたのが大半である。南北に並んだ切石を境に西方部に掘られた大型のF Y 1・3は、大正時代の大火灾に、焼け残った物を埋めるために掘られたゴミ捨て穴である。また、川原石を土台として切石を南北に配した遺構も重複関係から、大正の大火灾のものであることが判明している。

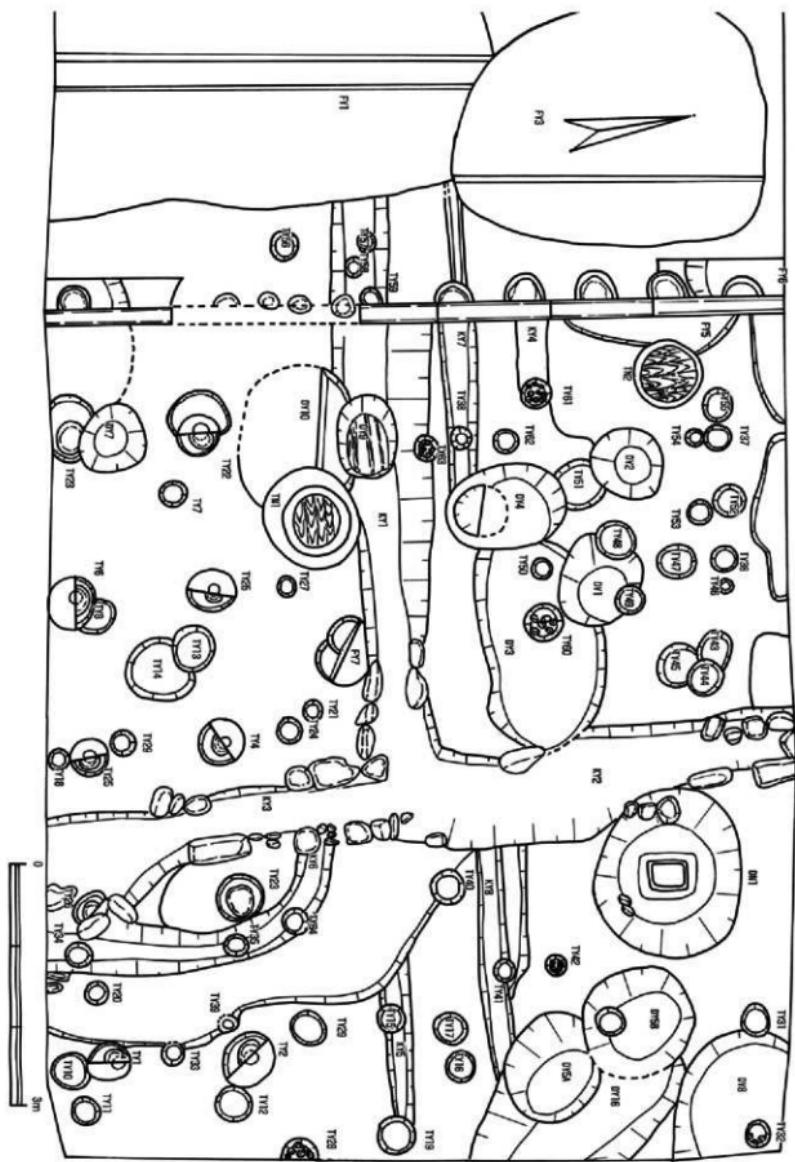
掘立柱建物跡、土壌、溝状遺構、井戸跡、柱穴、不明遺構の順で以下に説明したい。

(2) 掘立柱建物跡（第4図）

調査区からは、B Y 1～4までの掘立柱建物跡が検出された。柱穴の掘り方や底面の形態及び覆土の土色から4棟は4時期に亘って構築されたと推測される。

I期としては、B Y 2がある。調査区の南東に位置し、掘立柱建物跡を構成するT Y 10・12・19の3基を確認した。B Y 3を構成するT Y 1がB Y 2を構成するT Y 10を掘り込んでおり、B Y 2がB Y 3よりも先行して構築したこと示している。

B Y 2の全容は不明であるが、確認した柱穴の間尺は南北に2間（2.1m×2.1m）あり、柱穴の掘り方は円形状で直径50cmであった。柱穴の覆土に黄褐色の粘土を多量に含むのが特徴であり、調査区の東南及び北東に延びる掘立柱建物跡と推測される。



II期は、BY1がある。調査区の北東に検出され東方に延びる様相を呈している。TY17・28・29・31A・31B・32の柱穴で構成され、南北3間（1.81m×1.8m×1.8m）を確認した。南北3間は、梁行と想定され、東西に桁行を有す掘立柱建物跡と推測される。

III期の掘立柱建物跡としては、BY3がある。TY1～6・22・23・25・26の10基を確認した。掘り方は直径60cmの円形状を呈し、深さは50～70cmを測る。第6図に示すように底面に扁平の川原石を配置するのが特徴で、全ての柱穴に柱根跡が明確に観察できた。東西に4間並列して構築され間尺は（1.9m×1.9m×1.9m×1.9m）を測る。南北は、1間で1.65mを測る。この掘立柱建物跡は、北方を除く南・東・西に延びる可能性を示しており、全体的なことは不明と言わざるをえないが、KY2・3との重複関係から言えば溝状遺構のKY2・3に先行する建物跡と言える。

IV期の掘立柱建物跡としては、BY4が推測される。柱穴は長径50cm、短径40cmの梢円形の掘り方を有し、TY28・32のように覆土に小砾を含む形態もある。

BY4はTY42・61A・61Bの柱穴からなり、覆土に小砾を含む。深さが10～20cmと浅いことから礎石の根固めと推測され、すでに削平された箇所もあった。

（3）土壤（第8図）

DY1は、調査区の北西部に位置し、長径1.05m、短径1.0mの円形状に掘り込まれている。深さは45cmを測り、北方の壁は垂直に立ち上がり、南方部は緩やかに立ちあがる。覆土は、人工堆積状況であった。出土遺物としては、染付茶碗3固体分を始めとして片口、擂鉢、徳利、硯、蛸唐草文様の仏具徳利、壺片がある。染付碗は、肥前系の網目文様で18世紀以降の遺物であることからDY1は、この時期に構築された土壤と考えられる。

DY2はDY1の西側に位置し、円形に掘り込まれ深さは30cmであった。覆土は人工堆積であった。出土遺物としては、第16図39の櫛木鉢や第15図32の染付茶碗等がある。DY1と同様な年代が想定される。

DY3は東西に長径を有す大型の土壤であり、長さ2.65m、幅1.45m、深さは42cmを測る。北部でDY1、西部がDY4と重複する。底面にはTY50・60が掘り込まれている。

出土遺物としては、第16図46の陶器碗を始めとして飯坂岸窯の水注、カワラケ等があり年代としては、他の土壤との重複関係からDY1・4よりも先に構築された土壤である。KY2に関連する砾が東側上面にあり、KY2が新しいことを示している。共伴遺物から17世紀中頃から後半の年代が想定される。

DY4は、第7図で示すように梢円形を有し、南北の長さ1.5m、東西の幅1.05mであった。人工堆積状況を呈し、覆土からは16図45の飯坂岸窯の水注が出土している。隣接するDY3と同様な年代が想定される。

第5・10図で示したDY5A・5Bは掘り下げ前は1基と確認したが、掘り下げが進行するに従がって2基であることが判明した。两者とも人工堆積であり、DY5Aの覆土からは方形の土師質火鉢が出土しており、18世紀頃の遺物と考えられる。大きさは、DY5

Aが1.5mの円形で深さは54cmある。D Y 5 Bは、長さ70cm、幅は1.2m、深さは50cmであった。

東側に重複するD Y 6は、方形の大型形状であり、全体の約半分を掘り下げたと推測され、深さは、62cmであった。第10図のセクション図で示すように、3層面下層から掘り込んでいるのがわかる。写真図版の1がセクション状況であり、2層面が焼土で占められる。これは大正時代の大火灾跡を示している。薄い3層は、黒褐色の煤状の土質である。底面からは第12図4のカワラケ、20図56の擂鉢が出土している。この擂鉢は、口縁部の特徴から壺の擂鉢と推定され、19世紀前半の年代が与えられる。

結果的には、D Y 5 A・Bが深いことから後に掘り込んだように見えるが、層位の吟味からD Y 6が2基の土壙を壊して構築した様相を呈している。図で示すように、多くの遺物が出土している。中でも第13図9の飯坂岸窯の水注が注目され、蓋が付く器形であろう。年代としては17世紀中頃から17世紀後半に位置づけたい。

B Y 3を構成するT Y 23と重複しているD Y 7は、覆土の観察から上面から掘り込んでおり大正時代の大火灾跡を示すことから、それ以後に構築された土壙である。

第10図のD Y 8は約3分の2を掘り下げたと推定され、深さは88cmであった。人工堆積であり、覆土からは土瓶や染付飯碗、カワラケが出土している。遺物から19世紀前半の年代が想定される。底面に位置するT Y 32は、掘り下げたことによって確認したものでありD Y 8よりも先行する柱穴である。

第8図に示したD Y 9・10は、K Y 1と重複して構築されている。D Y 9は、K Y 1の底面から確認され、東西1.08m、南北70cmの梢円形に掘り込んでいる。K Y 1の底面からの深さは、57cmであった。泥炭質の覆土であり、木器類が出土しており第17図50の曲物の底板を始めとして、部材や杭類が認められた。底面には、板が敷かれており、水を溜める施設と考えられる。他に第16図41の飯坂岸窯の水注や第12図3のカワラケ、第17図48の香炉がある。

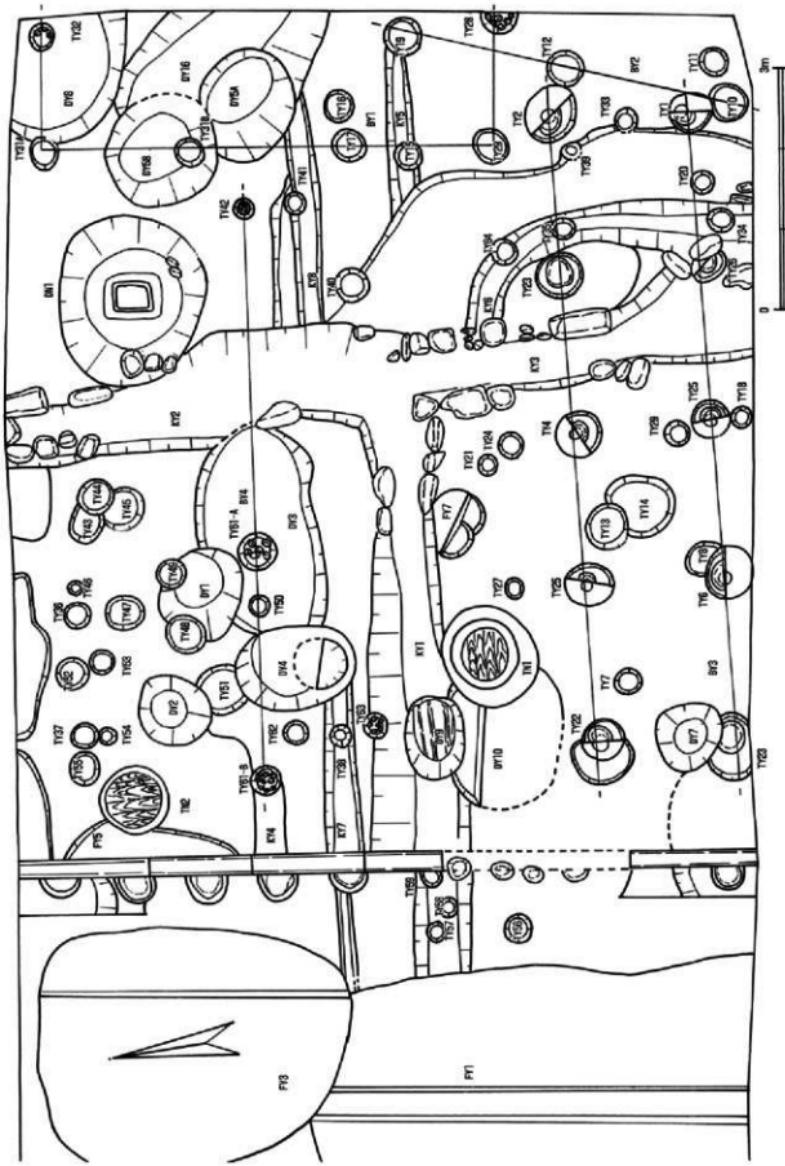
D Y 10は、長径1.1mであった。深さは32cmあり、三分の一を完掘した。D Y 9と同様に泥炭の土質であり、第17図51の差歎下駄の歎が出土している。他に第15図38は、織部のむこう付けである。年代はD Y 9が17世紀中頃、D Y 10は若干先行する17世紀前半が推測される。

(4) 溝状遺構（第3・7～11図）

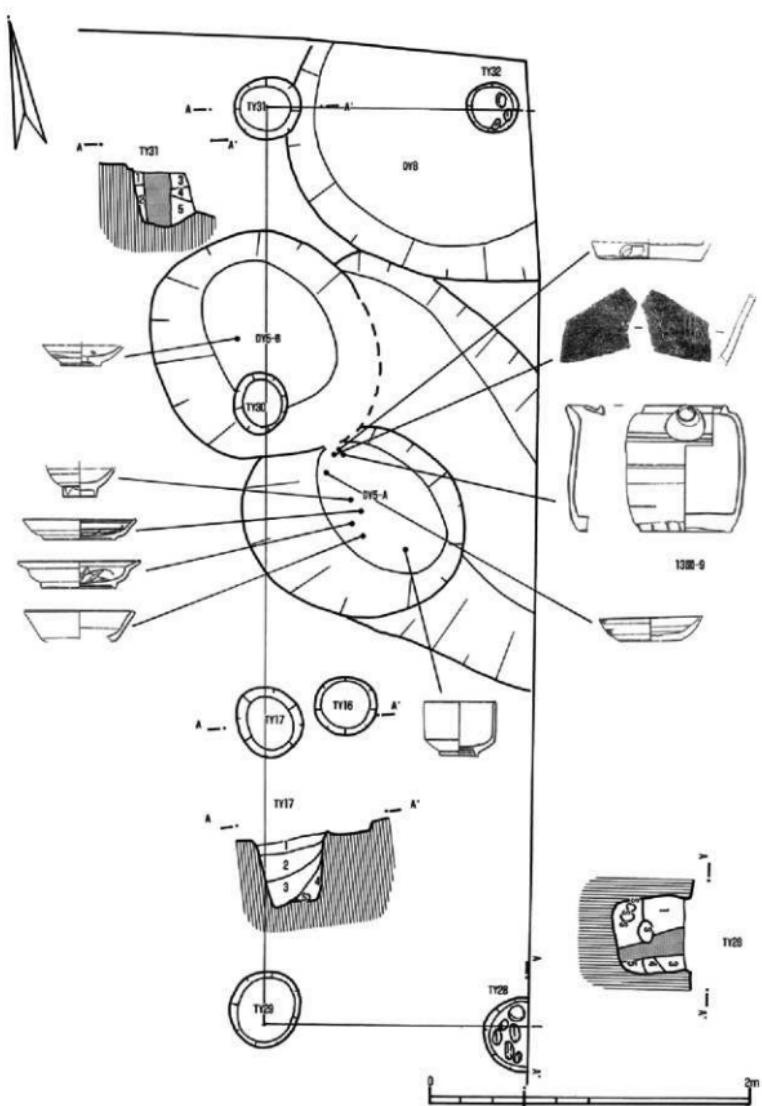
K Y 1は調査区の中央から、西方に延び北方箇所をK Y 2、南方箇所がK Y 3としたが、本来は「T」字型に配した溝状遺構である。各箇所を説明するため便宜上呼称した。従って文章の中では、地区名として使用した。

K Y 1地区は第8図で示すように、K Y 2・3から直角に分かれる付近には大型の川原石を縁辺に配している。溝の断面形態は、川原石が配置されている箇所は箱型であるが、東に行くに従って、次第に幅が広くなる。最大幅は1.2m、最小幅は70cmを測る。

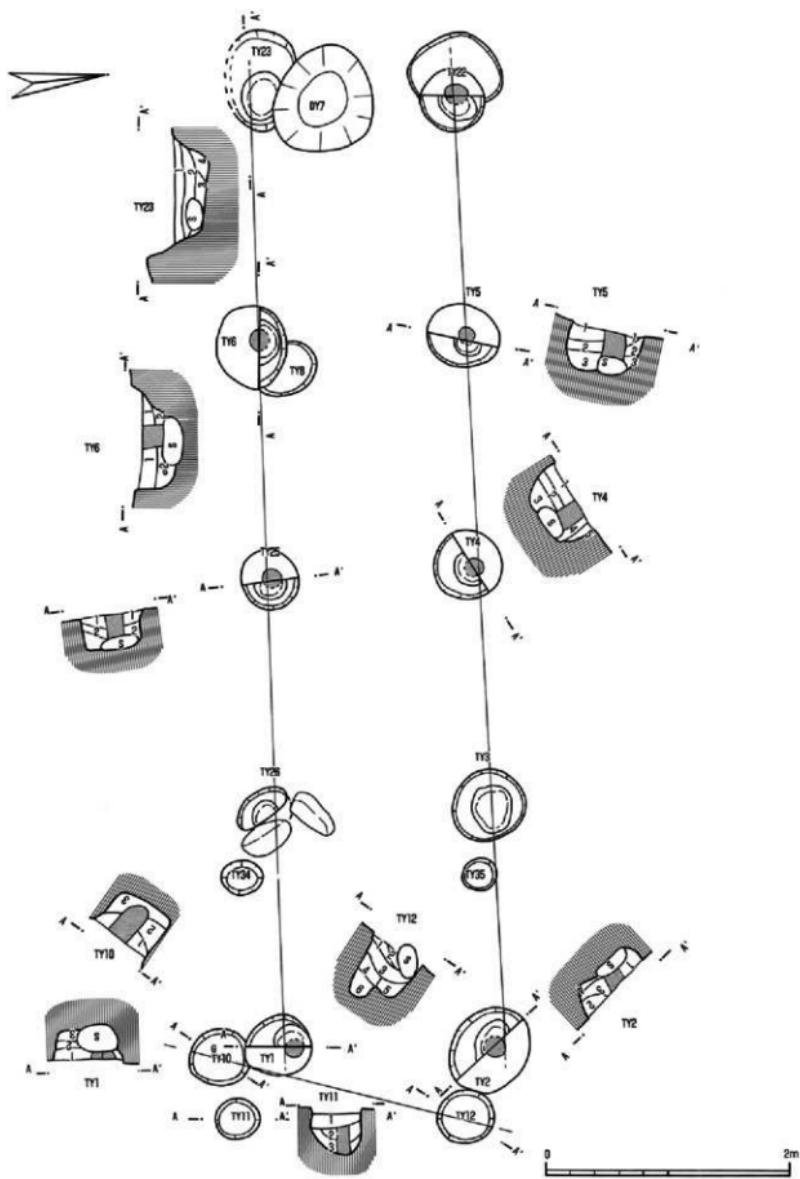
K Y 2地区は、北方に集中して川原石が認められた。この状況から縁辺には、全て川原



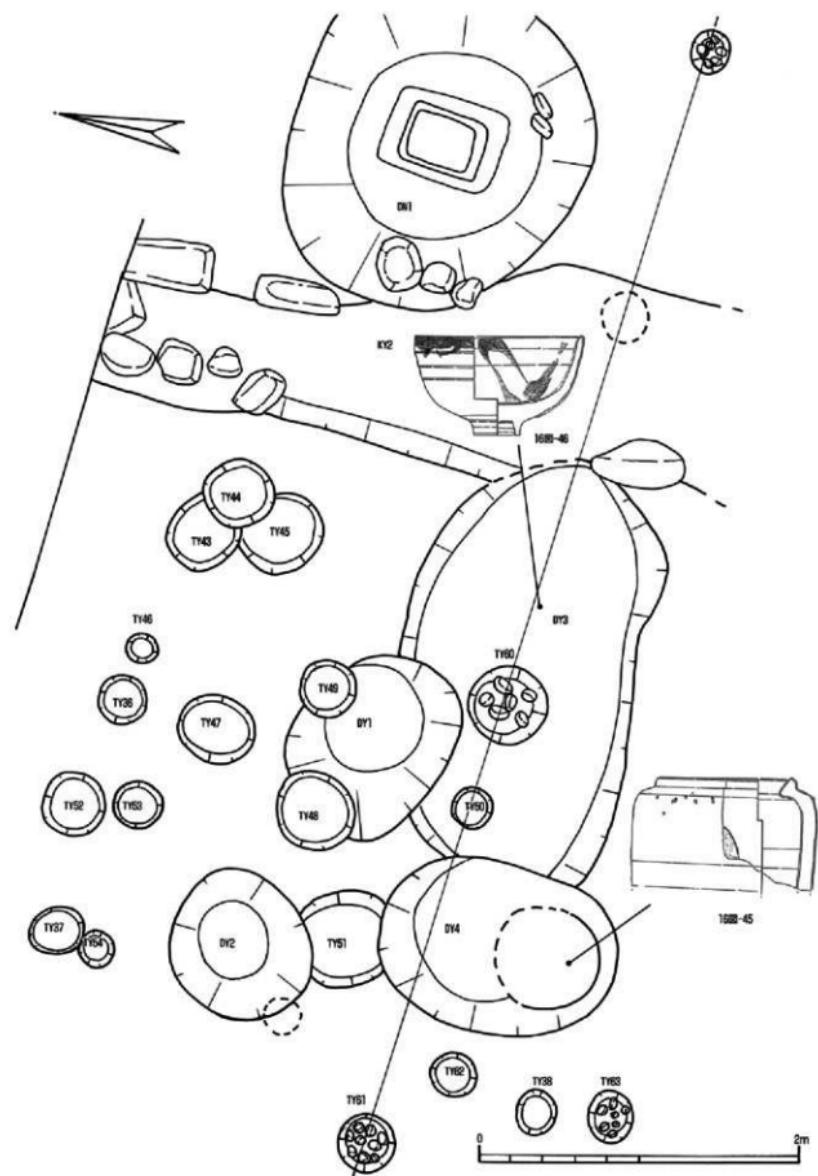
第4図 細立虫類生物誌全体図



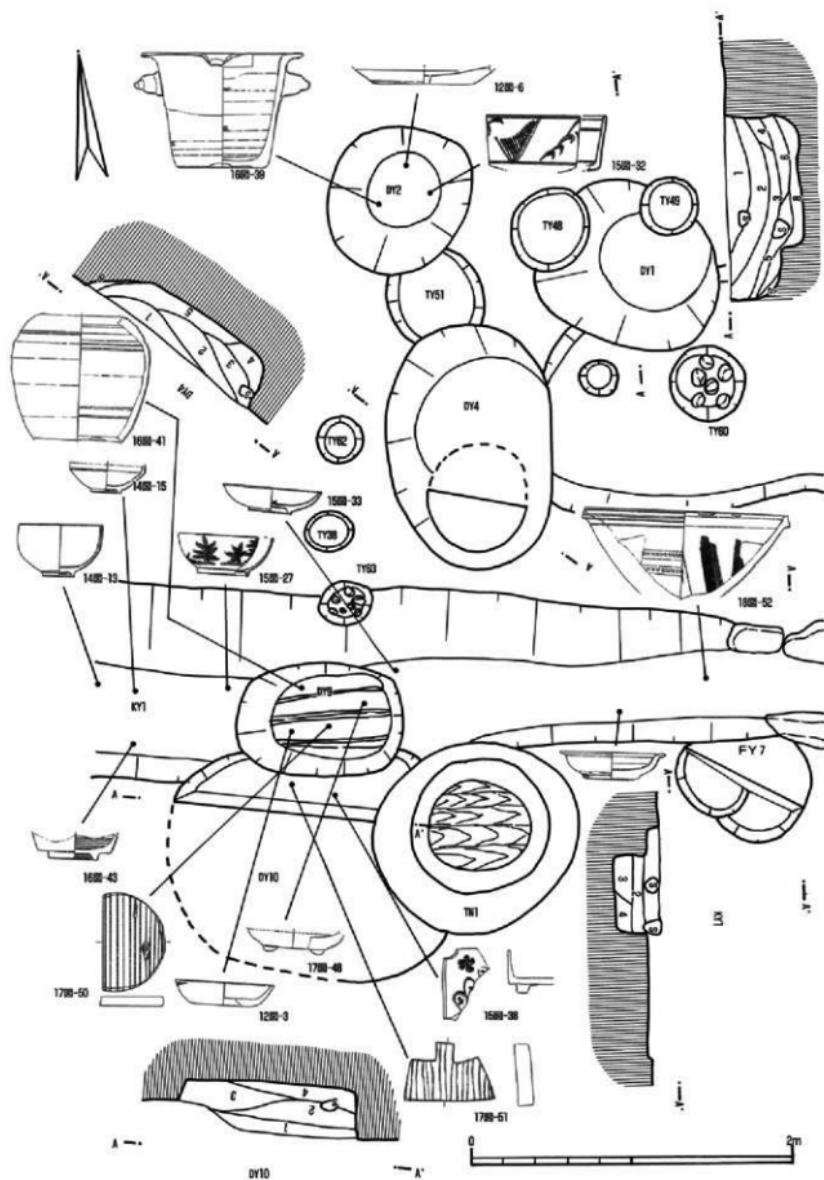
第5図 BY1、DY5・A・B平面図



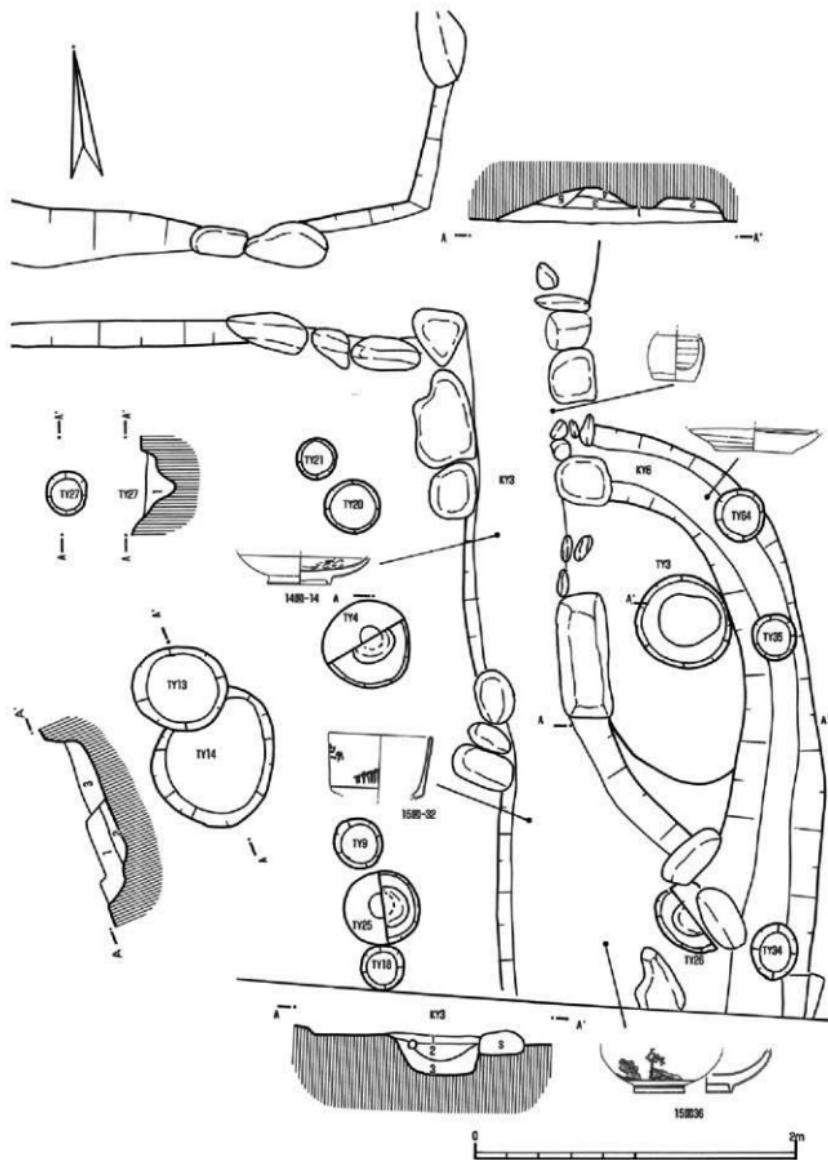
第6図 BY2・3平面図



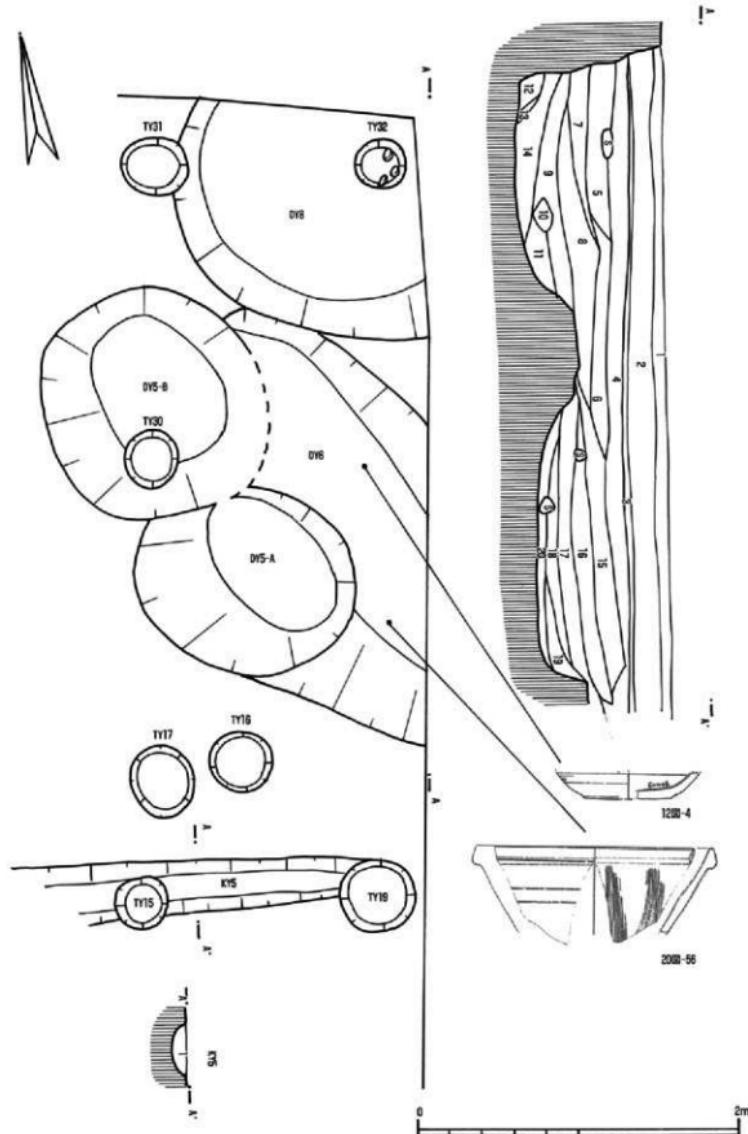
第7図 BY4、DY3平面図

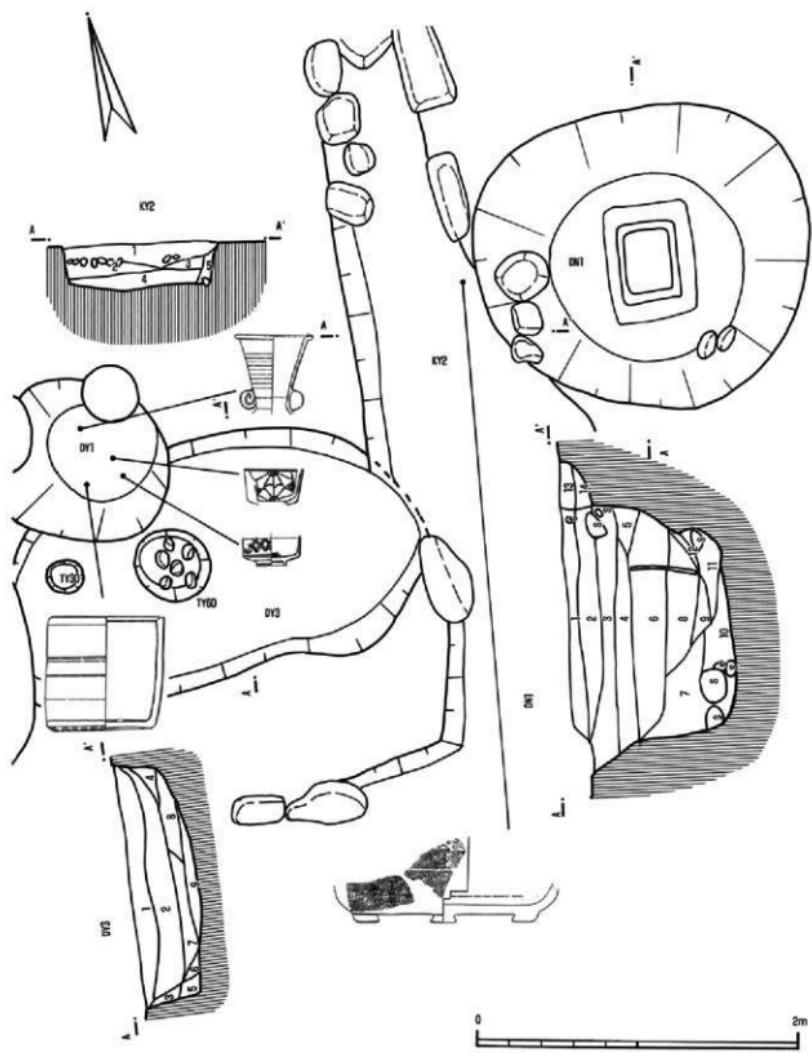


第8図 DY1・2・4・9・10、KY1平面図



第9図 KY3・6、TY13・14・27平面図





第11図 DN1、DY3、KY2平面図

石が配置されていたと考えられる。KY2の東側の不正な幅は、川原石を取り除いたため出来たものと想定される。

KY3地区は、南方で広がる様相を呈す形態である。BY3を構成するTY26は、KY3の覆土を掘り下げた結果、検出した柱穴である。この関係からBY3は、KY3よりも先に構築された掘立柱建物跡である。

覆土は、いずれも小礫や砂を含む土質であり、溝状遺構が水路や排水路として機能していたことを示している。

遺物は、底面を中心に出土している。第8図には、KY1の遺物を示した。遺物は、陶磁器が主流であり図示した以外にも擂鉢3箇体分、湯呑み碗、急須、青磁皿、唐津皿、伊万里染付碗、相馬碗、成島焼の切立、染付皿等がある。これらは、小破片であり出土状況から溝が機能していた時期に堆積したものであろう。地元の成島焼を含んでいることは、1780年より遡る遺構ではない。

また、この遺構に先行するBY3は、1780年代以前の掘立柱建物跡と言える。KY2地区からも擂鉢6箇体分を始め、成島焼、染付碗、相馬焼の土瓶等がある。KY1地区と同様に小破片で占められる。

KY3地区は、他の両地区よりも出土量は少なかった。第9図で示した第14図14の京焼絵皿、第15図32の備前染付碗、第15図36の伊万里白釉染付碗がある。これらの遺物から、18世紀後半～19世紀の範疇に位置づけられる。

KY4・5・7・8は、東西に延びる浅い溝状遺構である。幅は平均30cmあり、深さは第10図で示すようにレンズ状の断面形態であり、10～20cmであった。遺物はKY4から擂鉢、KY7からはカワラケ、KY8は唐津皿が出土している。これらの溝状遺構は、BY3・4と同様な方向に構築されており、掘立柱建物跡に関連するものと推測される。

KY6は、KY3から分かれて東に曲がり、南方に直進する溝状遺構である。幅は30cm～70cmあり、南方が広くなる形態である。深さは30cmあり、底の厚いカワラケ、第12図7が出土している。

(5) 井戸跡（第11図）

調査区の北東箇所に円形に掘り込まれたDN1が井戸跡である。上場で長径2.05m、短径1.85mあった。底面近くは、やや狭くなり1.15mの円形を有する。底面には二重の方形プランが確認された。外側は、77cm×55cm、内側は50cm×35cmを測り、長方形を呈する施設があった痕跡が認められた。

井戸跡は、人工的に埋められた覆土状況を呈し、底面には投げ込まれた川原石及び、中央に棒状の木製品が認められた。陶磁器等の年代を示すような遺物は出土しなかった。このことから、井戸跡の年代は明確には言えないが、覆土の土質の観察からBY3の掘立柱建物跡に併行する井戸跡と推測される。

(6) 柱穴（第4図）

掘立柱建物跡を構成する以外の柱穴は、42基検出された。覆土に小礫を含むTY63を除

き他は、底面や覆土に礫は認められなかった。遺物を含む柱穴は認められなかった。覆土に上面の土を含むTY43~49・52~55は、20世紀前半の柱穴と推測される。TY78・9・11・16・18・20・21・24・34・36・37・40・41・64は、覆土の観察から19世紀以前と考えられる。

(7) 不明遺構（第3図）

調査区西側に集中して確認した遺構群で、大正時代以降の年代であることから割愛したい。

4 出土遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査区からは、整理箱で20箱の量が出土している。これらは、F Y 1～5 及び2層を中心としたものであった。遺構に伴うものと3層面からの遺物は整理箱3箱にすぎなかつた。

これらの大半は、小破片で占められ復元や実測図を作成できたのは60点に過ぎなかつた。図示した遺物を大別するとカワラケ、土師質土器、陶磁器、擂鉢、木製品、石製品に分類される。

器形や用途さらに焼成窯について、細類を加え説明したい。なお、挿図番号と図版番号は、同一番号を使用した。

(2) カワラケ (第12図1～6)

復元した6点の外に、破片が数点出土している。カワラケは、酒を飲むのに使用され、一回きりの使用と推測されている。2・4は、内面に煤が付着しており、灯明皿として再利用した痕跡を有する。底部に回転糸切痕を残す轆轤整形であり、1・5に明晰に認められる。残りのカワラケは、磨滅が激しく明瞭でない。轆轤の回転は、右回りである。

形態は、口径に対して底部径が近いほど古いタイプと推測される。この点を考慮すれば、今回の出土したカワラケ底部径が狭い形態であり、17世紀中葉以降に位置づけたい。

(3) 土師質土器 (第13図10)

土師質土器は、軟質土器と瓦質土器が認められた。軟質土器は、第13図に示した手焙りであり、口縁部に菊花文の印判を施す形態である。底部には、三脚もしくは四脚の脚部を整形している。この手焙りは、16世紀中葉から17世紀初頭に多く見られる。出土箇所は、K Y 2 底面からであった。瓦質土器は、アンカ及び火鉢と想定される破片がD Y 5 の底面から出土している。火鉢は、方形の器形が想定される。18世紀初頭の所産と想定される。

(4) 陶磁器 (第12図～17図)

器形としては、碗・鉢・皿・片口・水注・徳利・植木鉢・花器・灯明皿・仏器・ぐい呑み・壺・壺・香炉・切立・等がある。列挙した順に説明する。

○碗 (第14図11～13・15・第15図27～32・36第16図46)

18世紀後葉～19世紀初頭頃の碗類である。大形の碗が激減し、小形碗が卓越する時期にあたり、今回の調査区からはこの形態の出土が最も多い。生産地としては、第15図の27～32は備前の染付け碗で19世紀初頭頃と想定される。K Y 1・D Y 1・2の覆土、K Y 3の上面からの出土であった。

第14図12の鉄輪碗は不明である。同図11・13・15の碗は、福島県の大堀相馬焼と判断され18世紀初頭の頃に位置する。K Y 1出土の15は灰釉腰折碗で米沢城二の丸調査区からも同様の形態が出土している。11は白緑釉碗で、D Y 5、13はなまこ釉碗でK Y 1からの出土である。

第15図36は、白釉染付碗でK Y 3から出土している。釉や染付けの特徴から伊万里の碗

と想定される。小形であり、他の碗類と同様の年代である。

第16図46は大形の碗で、かきに鉄釉をかけている。瀬戸・美濃窯の製品と考えられる。18世紀中葉頃の年代が想定される。

○鉢（第14図18・第15図26・38）

第14図18は、唐津焼の鉢でDY5Aから出土している。唐津焼の新しい段階と考えられ20世紀初頭頃と推測される。胎土に長石を少量含む。

第15図26は調査区の、遺構確認面上面2層から出土した伊万里の中鉢である。内外面に染付け文様を有する、20世紀初頭頃の所産と考えられる。同図38は、織部焼のむこう付けで、DY10覆土から出土している。底面に脚部を持つ形態であり、17世紀前半頃と考えられる。

○皿（第12図8・第14図14・17第15図33～35・37）

第12図8は、透明釉の皿で底面に明瞭な回転糸引き痕が認められる。糸引き痕から右回りの籠輪で成形している。KY1の覆土から出土した皿で、完形に近い形態であった。胎土や釉から飯坂岸窯の製品と考えられる。岸窯は、1644～1648年の期間で操業した窯であり、米沢市の遺跡では、中田町の大浦C遺跡から出土している。

第14図14は、透明釉の京焼絵皿であり、KY3から出土している。底部に刻印が押圧されている。半分が欠損しており、残った文字は「木」と読める。19世紀前半頃に位置すると推測される。同図17は、唐津の新しい段階の皿で長石を少量含む胎土である。2層からの出土であり第15図26の伊万里の鉢と同年代の20世紀初頭頃と考えられる。

第15図33は、地元の福田焼と推測される小皿である。この窯は、米沢藩九代藩主上杉鷹山公が財政の立て直しの一策として、焼成させた幾つかの窯の一つといわれている。起源や陶工の人物像も資料が乏しく明らかではないが、開窯は文化年間（1804～1817）とされる。皿や茶碗などの日用雑器を多く生産した話も聞かれる。KY1から出土している。

同図34・35は、DY5覆土からの出土であり、2点とも志野焼きの絵皿である。年代は、19世紀初頭頃と想定される。同図37は、底部や釉の観察から輸入磁器の小皿である。

○片口

小破片で占められ図示には至らなかったが、3箇体分出土している。DY1からは、大堀相馬焼と推測される片口が出土している。18世紀中葉から19世紀初頭頃と考えられる。

○水注（第13図9・第16図41・45第17図49）

DY5B北側底面近くから出土した第13図9は、復元できた唯一の水注である。器高は15.5cmある器形で蓋が付くと考えられる。器面には、二次焼成を受けた痕跡を有し、底部には回転糸引き痕が残る。注口の成形や釉の特徴から飯坂岸窯の製品であり、米沢市においての出土は初の器形である。41を除く製品も同様な特徴を有すことから飯坂岸窯の製品と考えられ、第16図45は口縁部、第17図49は底部である。45はDY4覆土から、49はDY5A上面からそれぞれ出土している。第16図41は口縁部及び底部が欠損している。DY9覆土出土で、茶壺の可能性もある。41は透明釉を使用、他の3点はなまこ釉である。41の

窯は、不明である。

○徳利（第14図24・第16図43）

徳利は、2層から出土した透明釉の自然文様を有し、中焼の形態であり、輪轍目が速い成形である。焼成窯は不明であるが、19世紀頃の製品と推測される。43も成形から判断して24と同じ窯場で焼成された製品と考えられる。

○植木鉢（第16図39）

植木鉢は、D Y 2 覆土から出土した陶製であり、下地に黒鉛の釉を施しワラダ入りの透明釉で仕上げている。口縁部は、押圧による四箇所の湾曲を成形して、その直下には突起部を付けて装飾している。園芸の流行は、17世紀の武家を中心とした屋敷建築における造園、植樹などから18世紀後半には、場所をとらない鉢植えの植物栽培に移行した。植木鉢の生産は、18世紀第4四半期から本格化したと想定される。陶製が1770年代頃と最も早く出現し、やや遅れて土製、磁製は19世紀に入ってから増加する。これらのことから、今回出土した植木鉢は18世紀後半頃の年代で瀬戸・美濃製品と想定する。

○花器（第16図42）

D Y 1 から出土しており、双耳仏花器と推測される。口縁部片であり、器形の全容は不明である。外面は柿釉、内面は透明釉を使用している。窯は不明であるが、年代は18世紀頃と考えられる。

○灯明皿（第14図29）

調査区北東隅の2層から出土した。無脚の形態で、一部欠損いるが内部に受けをもつ灯明皿でなまこ釉が施されている。胎土や釉及び成形から飯坂岸窯の製品であることは、まちがいなく17世紀中葉の年代が考えられる。

○仏器（第14図22）

馬上壺状の脚付小碗で、仏前に飯を盛る器種で肥前磁器の製品と考えられる。底面に墨痕があるが、文字なのか記号なのか判別出来なかった。K Y 2 から出土している。17世紀中葉に初めて出現し、幕末まで続く。今回の製品は、18世紀頃の年代が想定される。

○ぐい呑み（第14図21）

D Y 1 出土の小形の器は、飲用器としても用いられたが、和えものなどの料理を容れ、膳に載せられたことが「和漢三才図会」などからうかがえる。また絵画資料には刺身を盛った大皿の脇に置かれている例もあり、液体調味料を入れる容器としても用いられた。18世紀後葉の大堀相馬製品と考えられ、灰釉を施している。

○壺（第14図25）

K Y 3 から出土した豆壺がある。外面には、飴釉を施し内面は無釉である。瀬戸の製品と推測され、茶入れの可能性もある。18世紀頃に位置づけられる。

○壺（第14図23）

2層から出土した成島窯の製品で、胴下半部がある。内外面に鉄釉を施し、底面に回転糸切痕を残す小形の器形を呈する。成島窯は1780～1935年まで操業した窯場である。従つ

て年代を特定するのは、困難であるが他の共伴遺物から考慮すれば、19世紀頃と考えたい。

○香炉（第16図44・第17図48・49）

44は、青磁炻器である。内面は無釉であることから、香炉及びタバコ盆の火入れと考えられる。48は底面に小形の脚部を持つ製品で両面に鉄釉を施していることから、土瓶とも考えられる。49も48と同様である。49は、飯坂岸窯の製品である。

○切立（第14図20・第16図40・第17図47）

20は口縁部が欠損しており、器形は不明であるが長く延びた場合には、杓立の可能性もある。40は黒釉を両面に施し、底面には「ハマ」と呼ばれる窯道具が付着している。「ハマ」は粘土に粉殻を混ぜたもので、団子状にして製品と製品が接着しないように使用する。40は焼成の際にゆがんだ器形をしているにもかかわらず、あえて製品としている。これは茶道具の水差しとして活用したと考えられる。47も40と同様釉であり、3点とも成島窯の製品である。

（5）擂鉢（第18図～20図）

江戸時代を通して、出土する生活必需品である。擂る機能は、主に「食」に関連して用いられたと考えられ、文献資料から豆腐、ごま、芋類、味噌などを加工、貯蔵する用途に使われた。

これらの中で、産地が明確なものは第18図53・第20図57であり、飯坂岸窯の製品で底部側面に纏織から取り上げる際にできた、指押圧痕が認められる。他の擂鉢は美濃・丹波や堺・明石の生産地が想定される。

美濃の製品としては、第18図52・第19図54があり、52は18世紀頃、54は19世紀頃の年代が出土状況から想定される。丹波としては、第20図56があり、19世紀初頭頃の製品であろう。第19図55・58は、赤褐色に焼締められた製品であり、堺・明石と推測され19世紀後葉の年代が考えられる。

（6）木製品（第17図50・51）

木製の食品容器として、曲げ物が比較的多く利用されている。今回D Y 9から出土した50は曲げ物の底板である。曲げ物が利用されたのは、食品の質を保つためと、重量の点から運搬に便利であったことなどが主な理由であろう。共伴遺物から17世紀中葉頃である。

51は、差歛下駄の差歛部分である。下駄は、弥生時代の田下駄を別にして、五世紀に出現在現在まで存続する。今回出土の差歛下駄は、50の曲げ物と同様な年代が想定される。

（7）石製品（第29図59・第21図60・第22図61）

59は、長方形状の砥石であり、緑色凝灰岩を素材としている。b面には、鑿を用いて整形した痕跡が認められる。a面には、砥石として使用した使用痕跡があり、中央部が少しくぼんでいる。

60・61は、石製の碾臼で61が上臼であり、石材は安産岩を使用している。61aが上縁でくぼみが整形され、側面には横打込穴がある。61cには溝が放射状に配されている。60が下臼であり、芯棒孔が中央にある。60c面にも溝が配されている。製粉用の碾臼であろう。D Y 2からの出土であり、19世紀初頭の所産と考えられる。

5まとめ

小範囲の調査であったが、重複して遺構が検出され、遺物も各時期を示す多様な器種が出土した。これらの遺構、遺物を年代別に整理しまとめとしたい。

○遺構

検出した掘立柱建物跡は、掘り方や底面形態からⅠ～Ⅳ期に分けられる。Ⅰ期としては埋め土に粘土を混入した形態であり、柱穴の重複関係からBY2が今回の調査区では、構築されたと考えられる。Ⅱ期は、埋め土に小さい礫を混入しているもので、BY1があげられる。掘り方の深さも深く、TY32のように近世の土壤底面に確認している。

Ⅲ期は、底面に扁平の礫を配するのが特徴である。Ⅳ期は、礫石を配置する形態と想定され検出したBY4を構成する柱穴は、根固めの機能を持つと考えられる。年代は、Ⅰ期～Ⅲ期は中世、Ⅳ期は近世に位置づけたい。近世は、礫石の建物が主流と考えられ、米沢城が機能を失った段階で多くの礫石が削平されたと推測される。ただし、深く掘り込まれた土壤群は、痕跡が残ることが出来たと理解される。

遺物からⅠ期～Ⅲ期の年代を見てみると、出土量が極端に少なく困難である。唯一この年代の遺物として、軟質土器の第13図10の手焙が出土している。16世紀中葉頃で、掘立柱建物跡のⅢ期に併行すると考えたい。従って、Ⅰ期・Ⅱ期は15世紀後葉～16世紀初頭と推測される。

これらの遺構から今回の調査区には、米沢城「三の丸」建設以前にも集落が存在したことと物語っている。何も出土しなかった井戸跡は、近世以前と考えるのが妥当である。

Ⅰ期～Ⅲ期の掘立柱建物跡の検出例としては、昭和59年（1984）の上浅川遺跡第1次調査を始め、米沢城「三の丸」、大浦C遺跡、東屋敷館跡、米沢城跡「二の丸」、箱山北館の調査等がある。

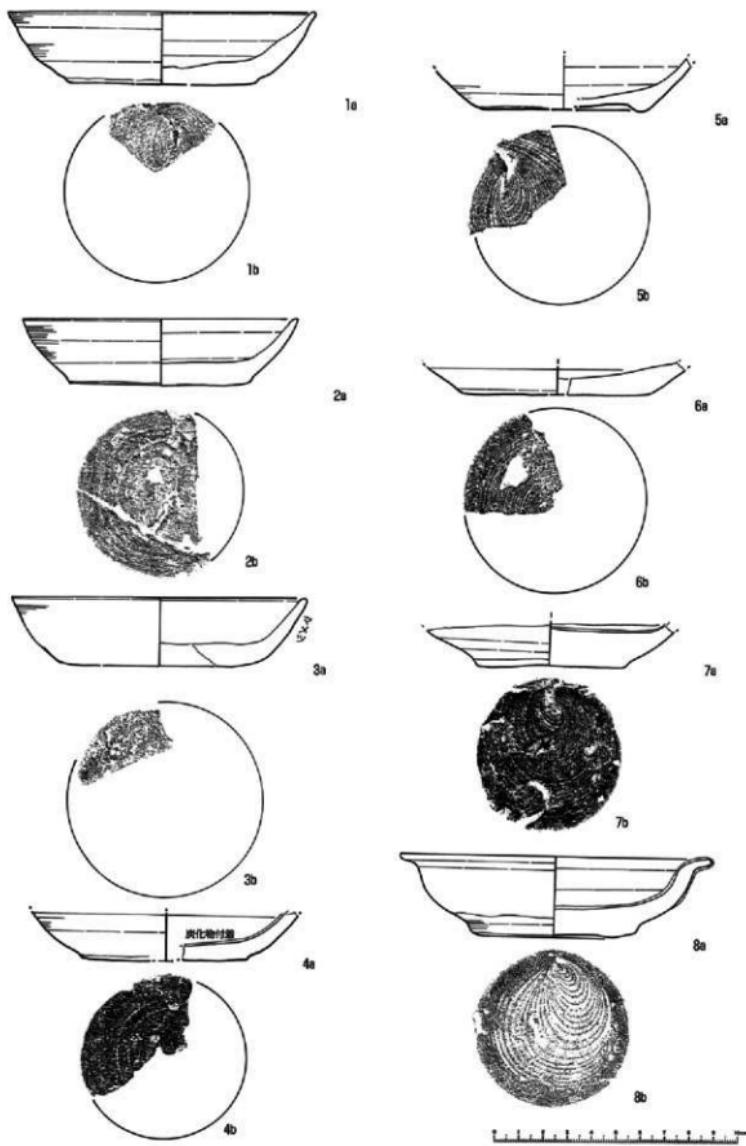
これらの遺跡に共通するのは、掘立柱建物跡が主要遺構であり、近世以前に位置づけられている。一連の調査成果が示すように今回の掘立柱建物跡も、近世以前としたい。出土遺物が少ないことも同様である。

近世の遺構群としては、Ⅳ期の礫石建物跡の一部や、土壤群及び溝状遺構がある。出土遺物は、17世紀中葉～20世紀までの陶磁器が大半であり、遺構群もこれらの遺物群に併行すると推測される。

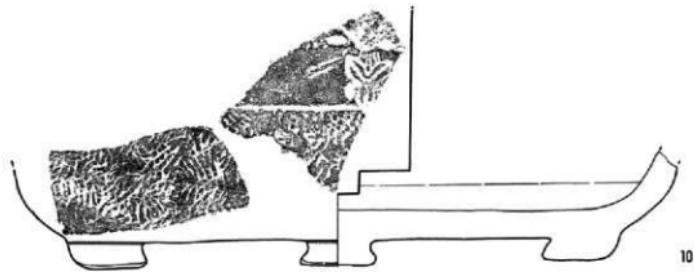
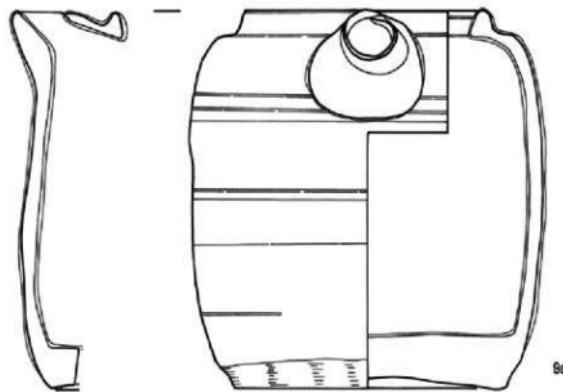
出土した遺物の中には、生活必需品以外の植木鉢や花器、茶道具も含まれており、上級家臣団の日常生活の一端を反映した遺物といえる。

今回出土した遺物のなかで、飯坂岸窯製品が注目される。この窯は、1644～1648の操業である。器種としては、水注・土瓶・灯明皿・播鉢などの日用雑器が出土した。これまでにも大浦C遺跡から出土しているが、多様な器種が出土したのは、初めてである。操業期間が短期間であることから、標準となる遺物と言える。

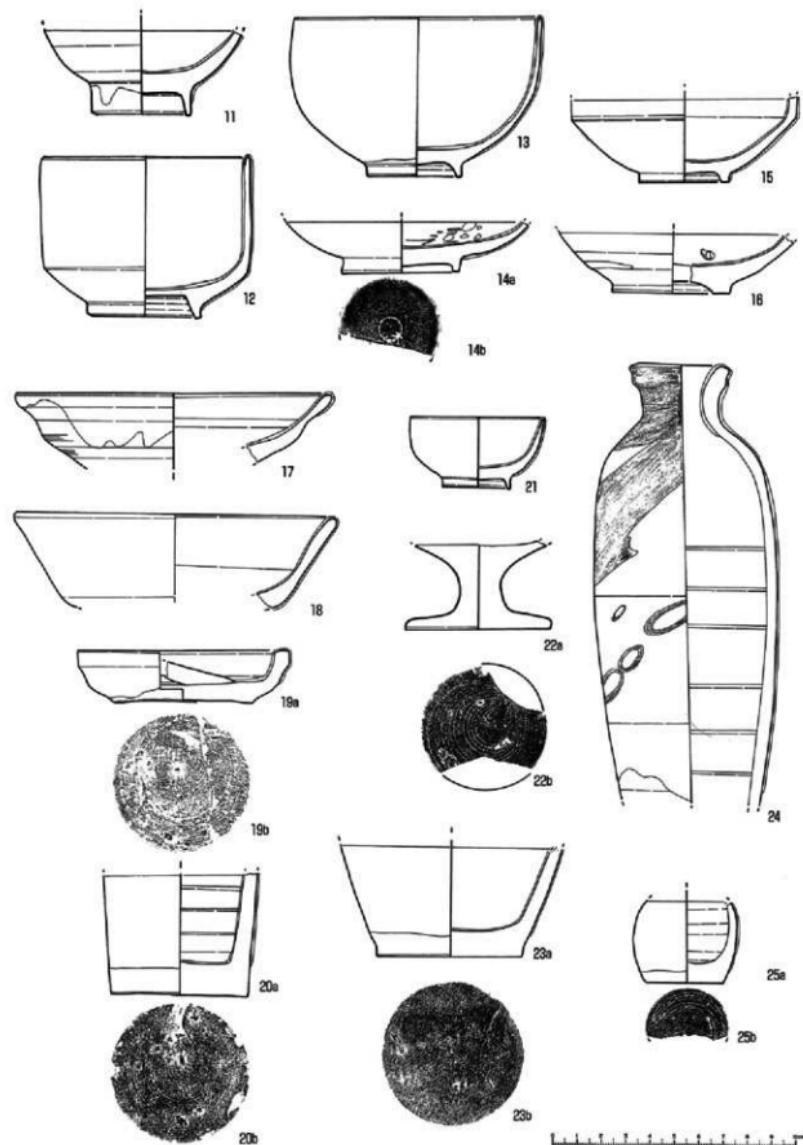
最後に、今回の調査にあたり、ご協力いただきました関係機関各位始め、現場で暑い季節のなか作業に従事してくださいました作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。



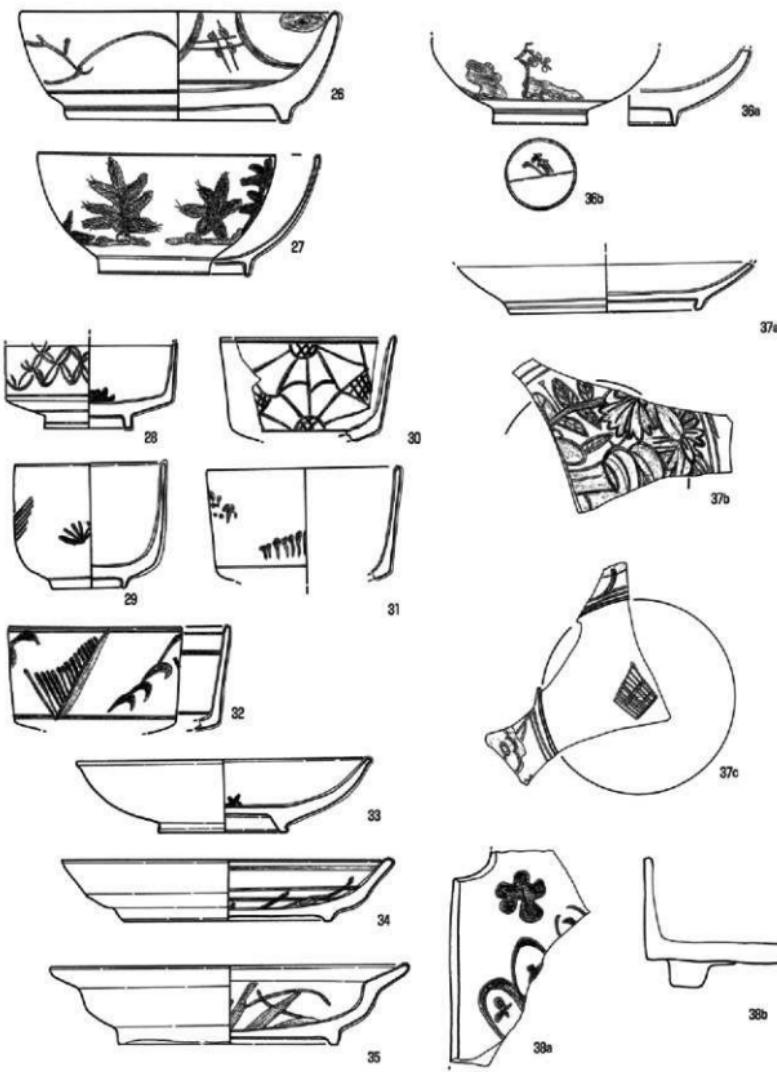
第12図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（1）



第13図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（2）

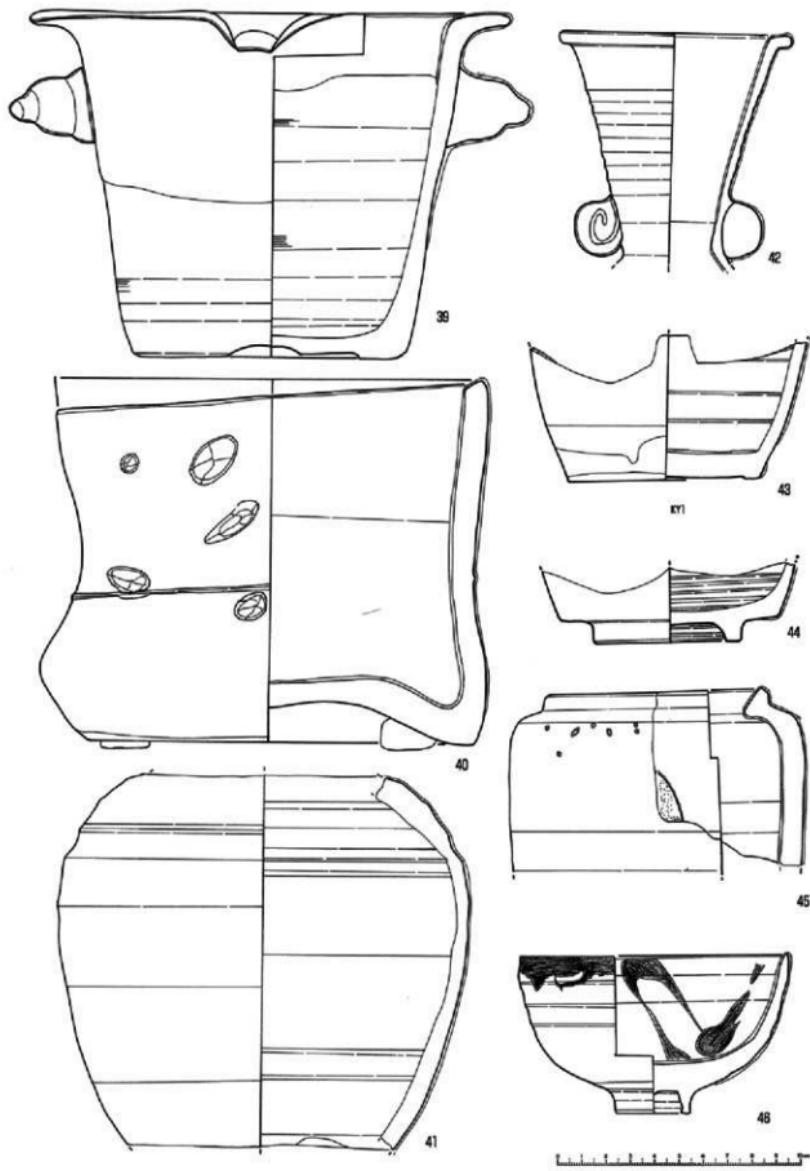


第14図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（3）

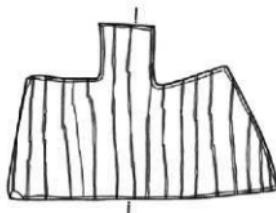
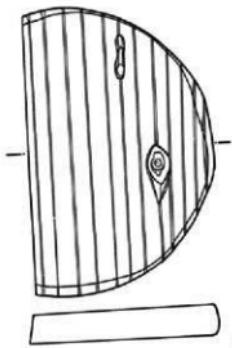
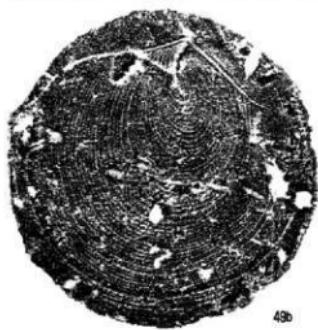
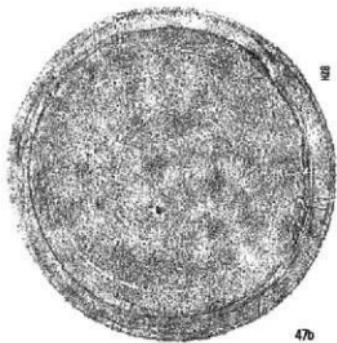
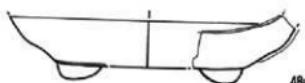
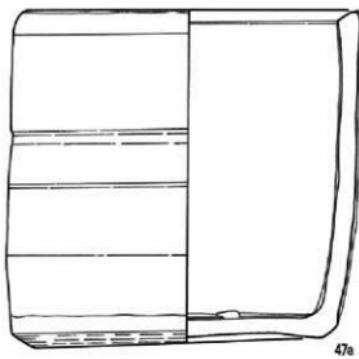


第15図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（4）



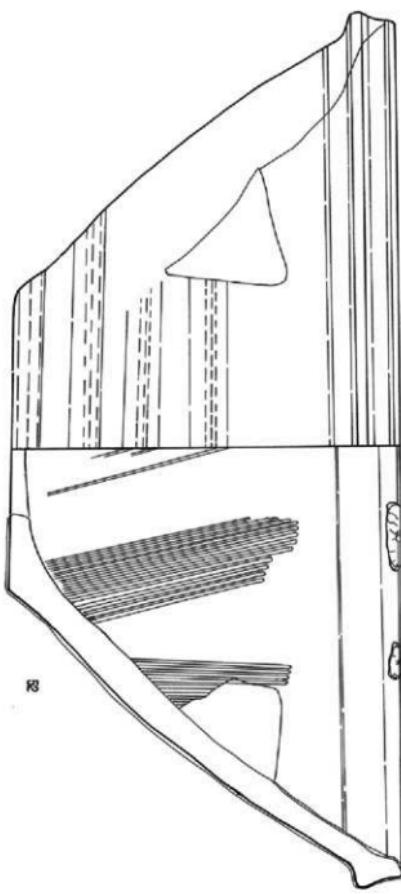
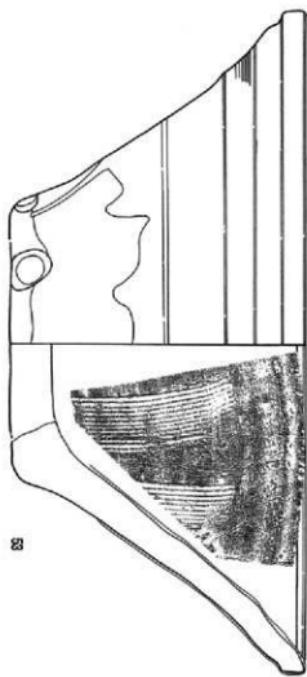


第16図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（5）



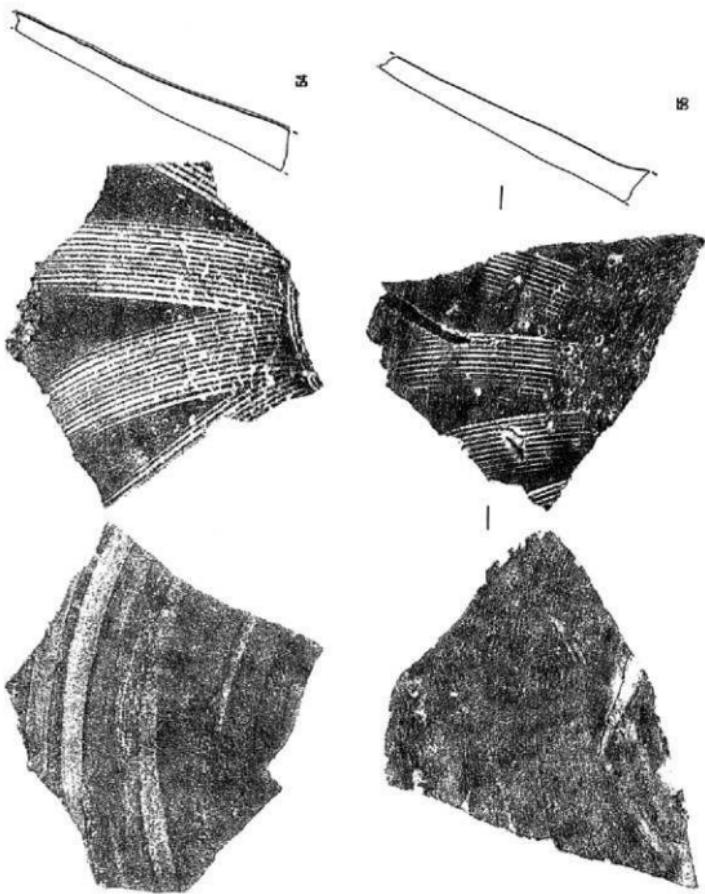
第17図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（6）

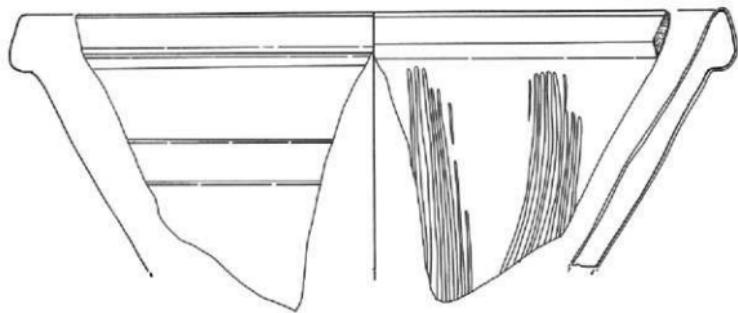
第18図 米沢城跡「東三の丸」出土漆器彫刻図(7)



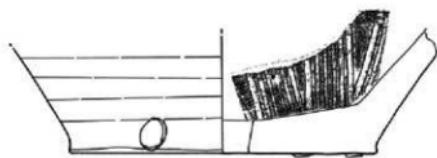
第19図 米沢城跡「東三の丸」出土遺物実測図（8）

1 cm

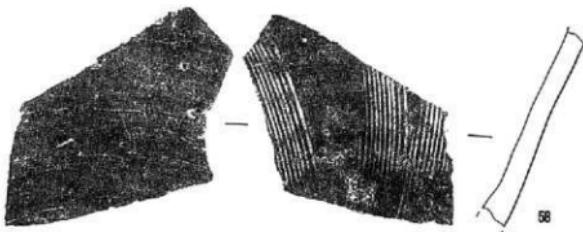




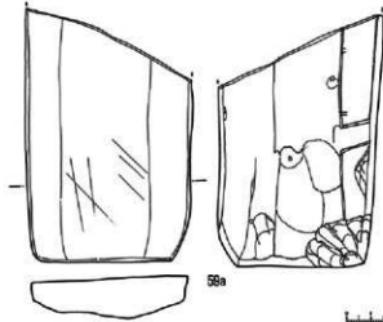
56



57



58



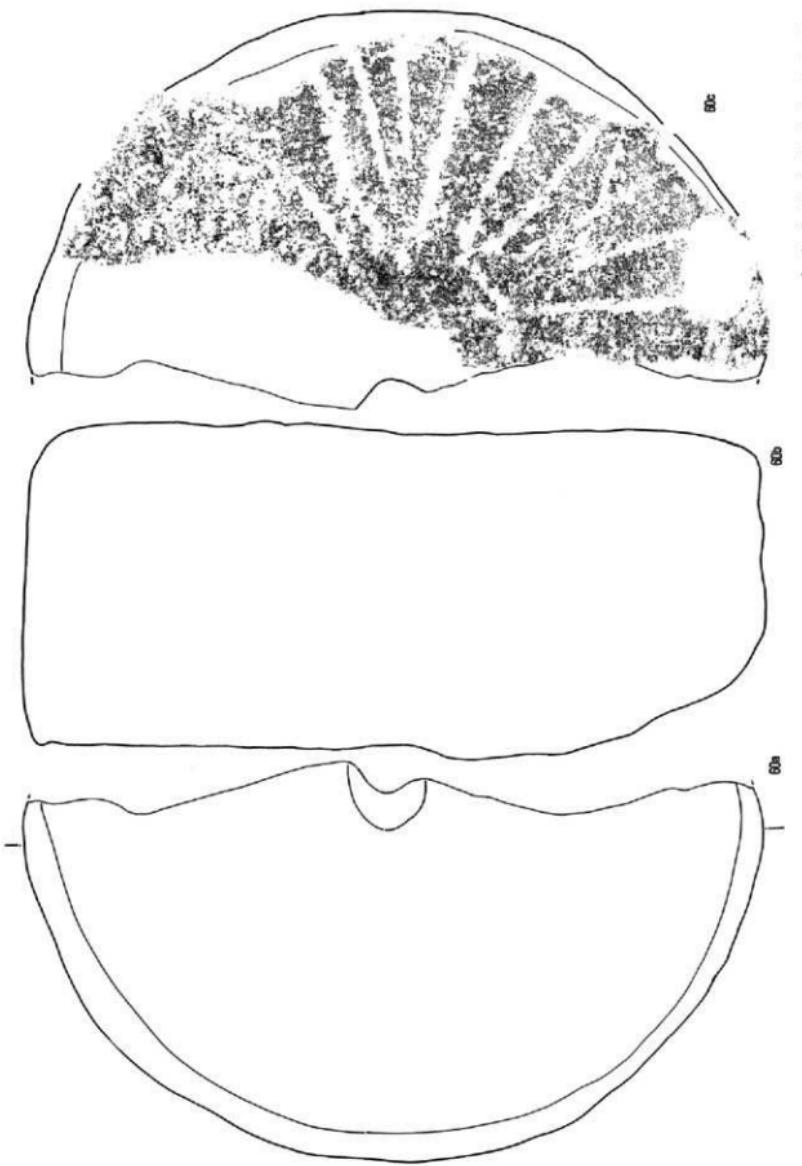
59a

59b

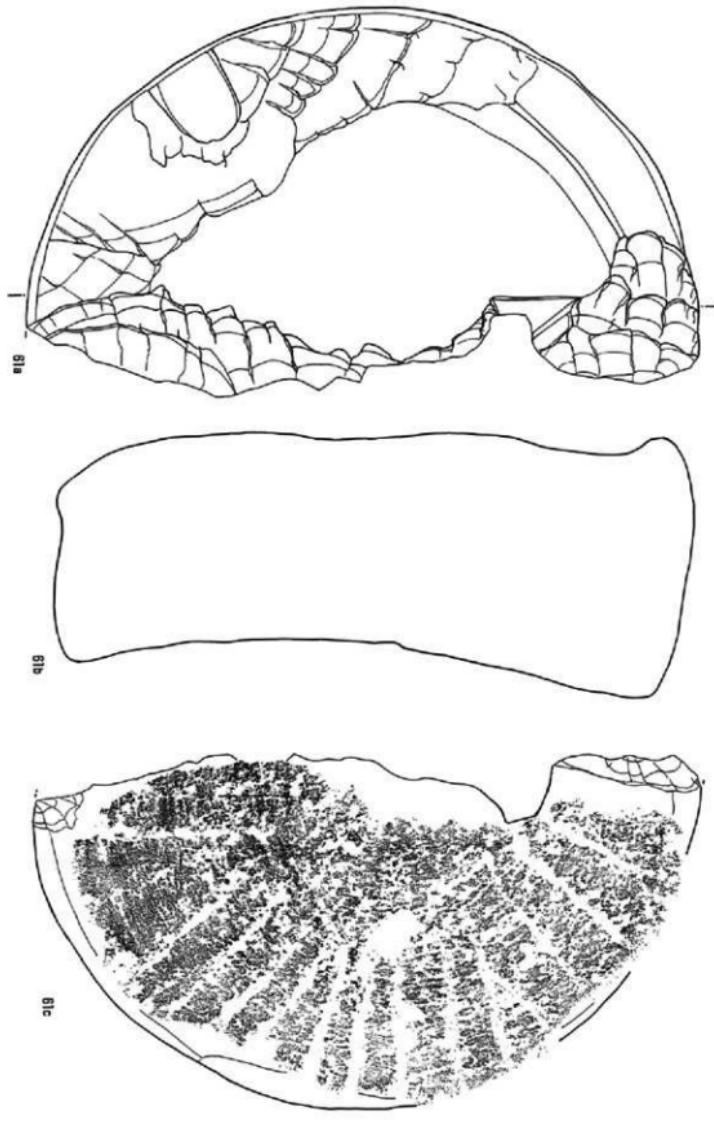


第20図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図（9）

第21図 米沢城跡「東三の丸」出土遺物測量図(10)



第22図 米沢城跡「東三の丸」出土遺跡実測図 (11)



参考文献

- 手塚 孝・菊地政信 1985 上浅川第1・2次調査報告書
米沢市埋蔵文化財報告書第14集
米沢市教育委員会発行
- 菊地政信 他 1987 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書第1集米沢城跡「三の丸」
米沢市埋蔵文化財調査報告第19集
米沢市教育委員会発行
- 浅倉有子 他 1992 特別展図録絵図でみる城下町よねざわ
米沢市立上杉博物館発行
- 月山隆弘 他 1994 米沢城発掘調査報告書
米沢市埋蔵文化財調査報告書第44集
米沢市教育委員会発行
- 月山隆弘 他 1998 東屋敷館跡
米沢市埋蔵文化財調査報告書第58集
米沢市教育委員会発行
- 菊地政信 他 2000 米沢城跡「東二の丸跡」
米沢市埋蔵文化財調査報告書第68集
米沢市教育委員会発行
- 手塚 孝 他 2002 館山北館跡
米沢市埋蔵文化財調査報告書第79集
米沢市教育委員会発行

報告書抄録

ふりがな	よねざわじょうしひがいさんのもる						
書名	米沢城跡「東三の丸」						
副書名	米沢城跡「東三の丸」発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第86集						
編著者名	菊地政信						
編集機関	米沢市教育委員会						
所在地	〒992-0012山形県米沢市金池三丁目1-55号 TEL (0238) 22-5111						
発行年月日	平成16年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
よねざわじょうしひがいさんのもる 「東三の丸」	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ねんとうまち 門東町 一丁目 3008-2 3008-5 3008-11	6202	米沢市 遺跡番 号 N-543	37度 54分 30秒	140度 6分 45秒	169,29m ²	マンション 建設に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
米沢城跡 「東三の丸」	城館跡	中近世	掘立柱建物跡 井戸跡・土壙 溝状遺構	土師質土器 飯坂岸窯製品 陶磁器類	柱穴の底面に石 を配した形態を 確認		

写 真 図 版



▲ 東壁セクション状況（西方から）

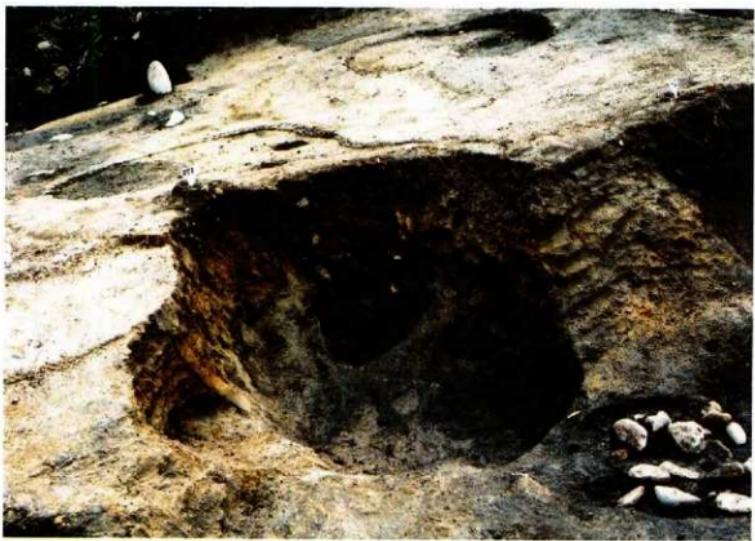


▲ 遺構全景（西方から）

図版2



▲ DY 1 半掘状況（南方から）



▲ DY 1 完掘状況（南東から）



▲ DY 1 双耳仏花器出土状況（東南から）



▲ KY 2 セクション状況（南方から）

図版 4



▲ KY 3 ブラン確認状況（南方から）



▲ KY 3 掘り下げ状況（北方から）

図版 5



▲ TY1半裁状況（西方から）



▲ TY1振り下げ状況（西方から）

図版 6



▲ TY2半裁状況（南西から）



▲ TY23半裁状況（北西から）



▲ TY4 半裁状況（南東から）



▲ TY4 掘り下げる状況（南方から）

図版 8



▲ TY5 半裁状況（東方から）



▲ TY5 掘り下げ状況（東方から）



▲ TY 6 掘り下げ状況（北西から）

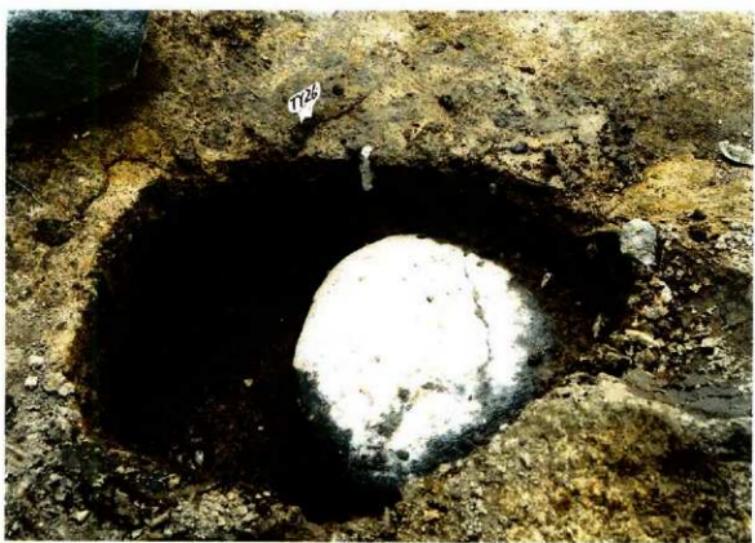


▲ TY22 掘り下げ状況（東方から）

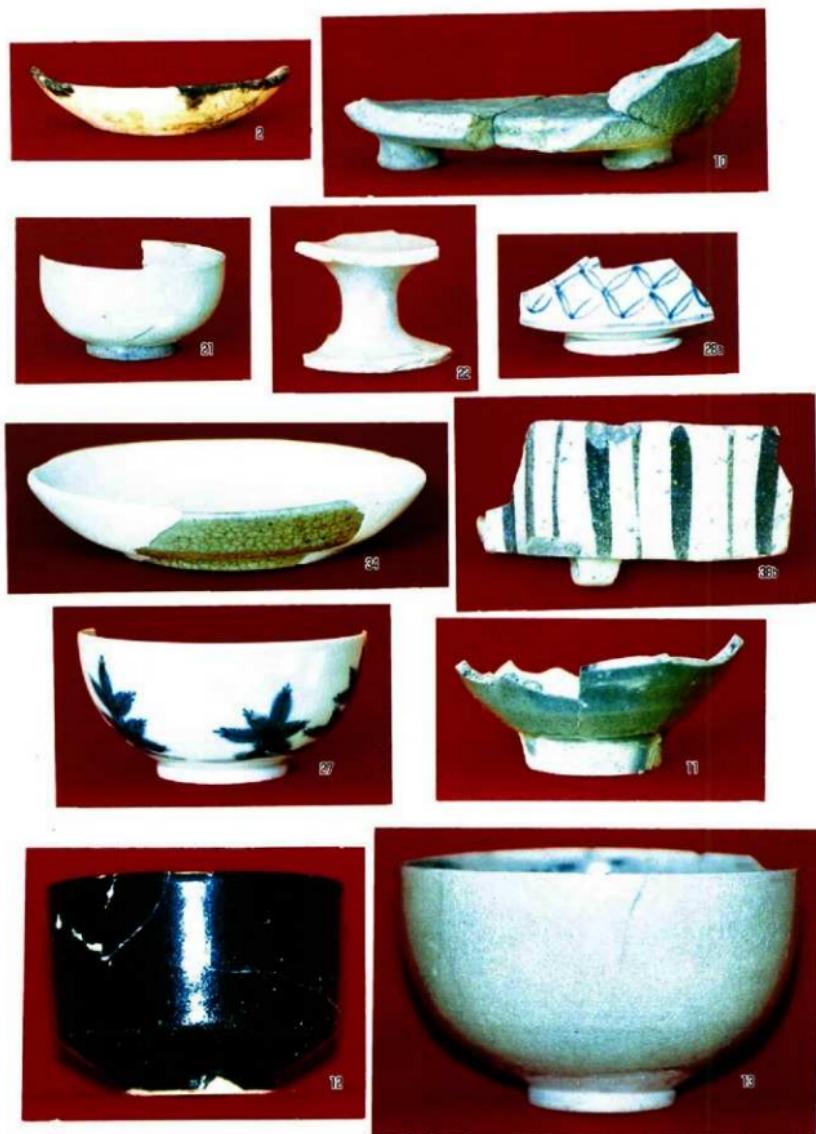
図版10



▲ TY25振り下げ状況（東方から）



▲ TY26振り下げ状況（南西から）



出土遺物 かわらけ、手焼き、陶磁器

圖版12

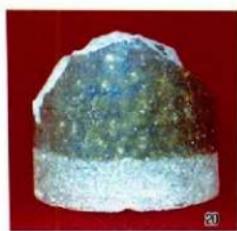


出土遺物 かわらけ、陶磁器、磁石

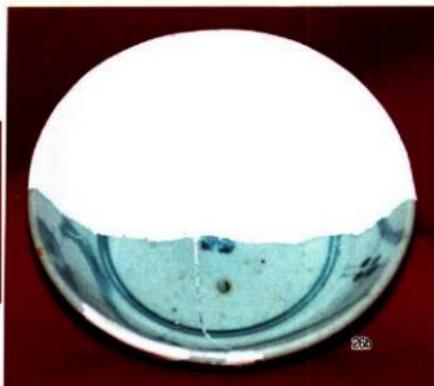


出土遺物 水注（飯坂岸窯）

図版14

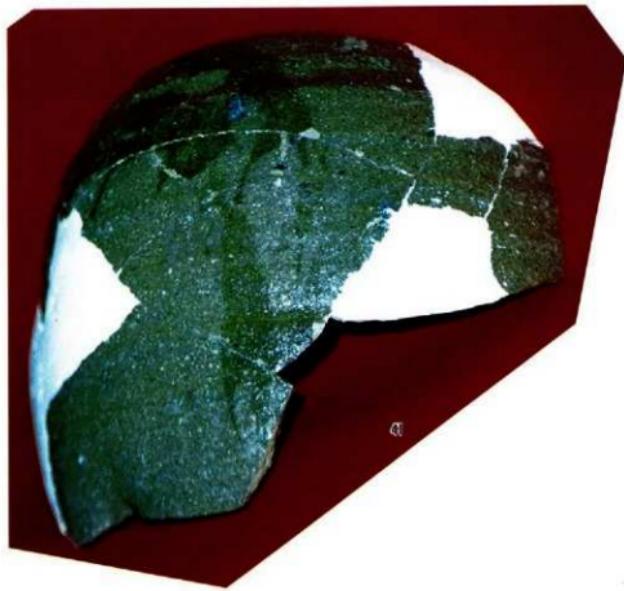
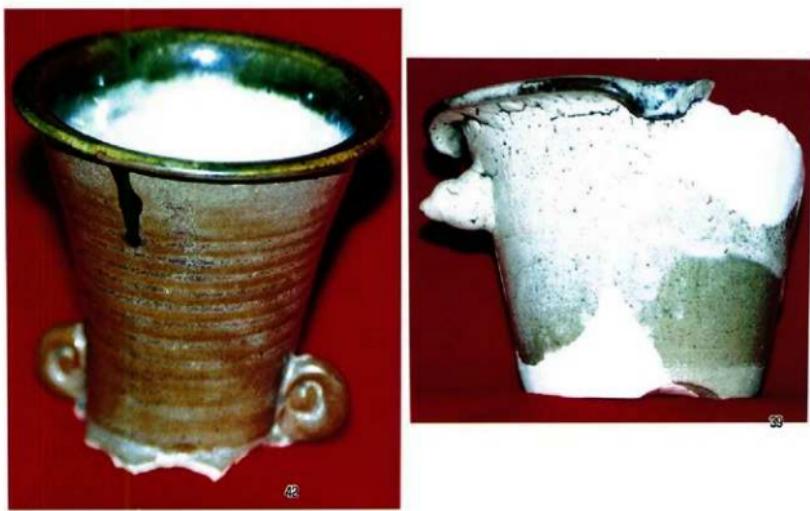


出土遺物 切立、徳利



出土遺物 陶磁器碗、染付け皿

图版16

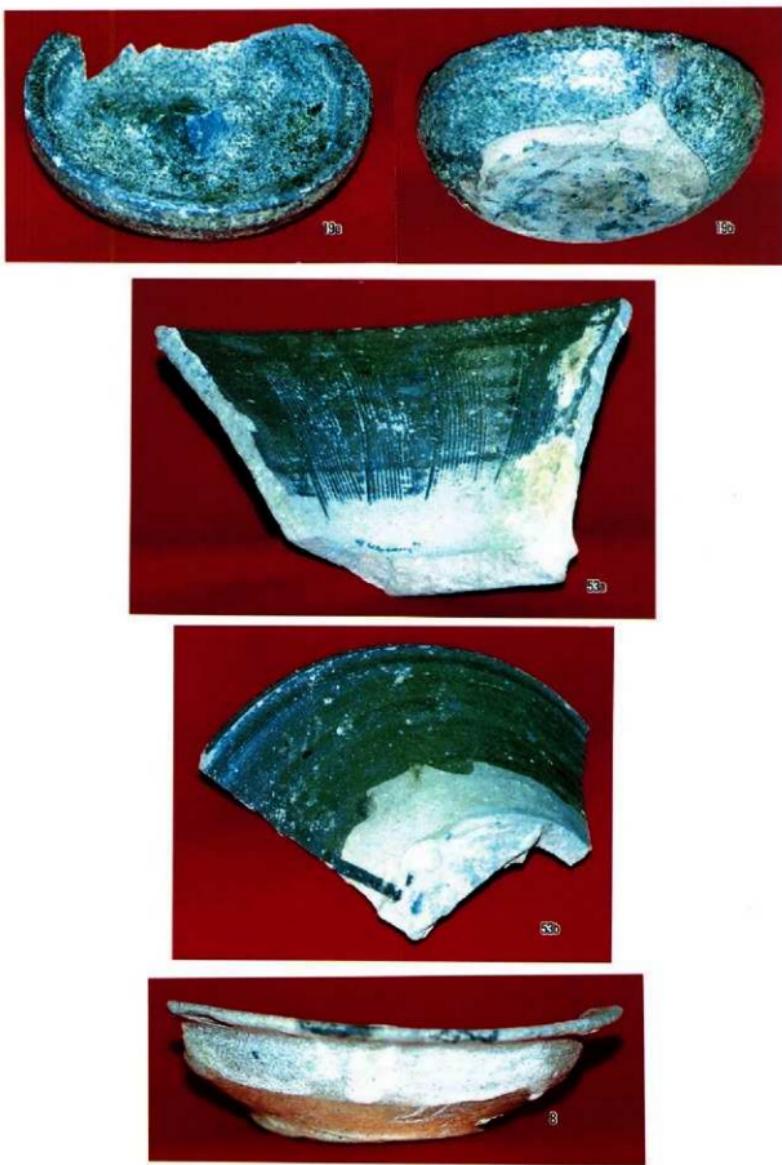


出土遗物 双瓦仙花器、植木鉢・水注



出土遺物 陶磁器染付け碗・他

圖版18



出土遺物 灯明皿、擂鉢



出土遺物 掏鉢

図版20



出土遺物 振鉢内面



出土遺物 振鉢外面

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第86集
米沢城跡「東三の丸」
発掘調査報告書

平成16年3月23日印刷
平成16年3月31日発行

発 行 米 沢 市 教 育 委 員 会
米沢市金池三丁目 1-55
TEL (0238) 22-5111

印 刷 株式会社 羽 陽 印 刷
米沢市中央三丁目 9-22
TEL (0238) 23-0467